

---

# IS ~ 妄想の果てに ~

霧幻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS〜妄想の果てに〜

### 【Nコード】

N8645Z

### 【作者名】

霧幻

### 【あらすじ】

女性しか動かせないISを動かした少年がいた、少年の名は織斑おりむ一夏いちか。だがその少年がISを動かす前からISを動かせる少年達が、名は双月そうつき霧幻むげんと神崎しんみき無壊むかい。この3人がおりなす物語は、

注意書きや設定（色々変わるかも）（前書き）

注意書きはちゃんと読んでね。

## 注意書きや設定（色々変わるかも）

### 注意書き

- 注意1 主は初めて？小説を書きます。
  - 注意2 設定？、、、色々酷いです。
  - 注意3 主はまだ学生です、なのでいつ投稿できるか、、、。
  - 注意4 たまに？よく日本語がおかしくなると思います間違えていたらおしえてね（笑）
  - 注意5 あたりまえかもしれませんがなかなか妄想がひどい、、、。
  - 注意6 オリキャラ無双です、、、。
- それでもOKな寛大な心を持っている方は、、、。  
オリキャラやその他の説明。

双月 霧幻<souzuki mugenn>

身長165cm。誕生日不明。

世界で数少ない男でISを操縦できる少年。双月 霧幻という名が本名なのは不明。彼の過去も不明と、、、とにかく謎が多い。そして無口でなにを考えているのかがあまり分からない。そしてよく女性に間違えられる。男版シャル？といった感じ。使用IS名はエグゾス。IS適正はS。

神崎 無壊<sinzaki mukai>

身長174cm11月13日生まれ

同じく男でISを操縦できる面倒事が嫌い（自称）口癖は「いいか？よく聞けおれは面倒がきらいなんだ」と言うわりには千冬の仕事を手伝ったり一夏の嫁ゲフンゲフン、、、女子勢にアドバイスをしたりと、、、本当に面倒が嫌いなのか？と疑問を持つほど。そして束や千冬と仲が良い。使用IS名はプリンガー。IS適正A。

エグゾス(ゼイン) < eguzosu zeinn >  
霧幻が使用するISおかしな点しかない。まずなぜしゃべる?そして普通ISのコアは1機につき1個のはずが3個あったり単一仕様ワンオフ・アビリティ能力を複数使用可能だったり拡張領域が無限だったり、色々カオス。束もお手上げ状態。さらに基本性能は今のところすべてのISを凌駕する圧倒的な性能。機体カラーは主に黒と赤。

#### 使用武器

RRS - FENRIR 通称 銀狼ぎんろう

当たれば勝ちと、とにかく凄まじい破壊力と弾速をほこる粒子砲。連射はできない。(そもそも1発当たっただけですらオーバーキルなのに、)エネルギー消費量もやはり多い。ただ、エグゾスはISのコアを複数所持しているのでエネルギー切れは基本起こさないから使用可能な武装の1つ。

LWR - GRIFFON 通称 グリフォン

簡単に書くとエグゾス版 雪羅せいろである。エネルギーを集中させレーザーブレードやエネルギーシールドを形成したり集中させたエネルギーを弾にし撃ちだせたりすることもできる。また威力は低いが拡散させてショットガンのように使用することも可能。エネルギー切れをおこさ(ry)。

MWB - KARURA 通称 刈羅かりら

13個のオービット砲のことを刈羅と呼んでいる。これもエネルギーシールド(全体を囲うように使用すればエネルギーフィールド)を形成でき威力もなかなか。ガンダムのアカツキのドラグーン的な物との捉え方でOK。こちらもエネルギー(ry)。

MWHG - ORC 通称 オルク

実弾兵器。威力はライフル以上なハンドガン(おい)連射もでき装填数もなかなか。欠点はやはり弾切れか、。

MWNB - MOONLIGHT 通称 月光げっこう

実剣。と、言うより刀。零落白夜れいらくひやくやに近い能力 白牙一線はくがいつせんと呼

ばれる機能付き。能力の使用にはエネルギーを消費する。

プリンガー<burninga>

無壊が使用するIS。近距離での戦闘が得意。第3世代型のIS。作ったのは束。

#### 使用武器

罪を切り刻む者<グラン・オルカ>

実剣。剣というか大剣。かなり大きい。そして破壊力も大きい。

終らせる者<エンド・イフ>

実斧。罪を切り刻む者<グラン・オルカ>性能はほぼ同じただしこちらは れいらくひやく 零落白夜 に近い能力 砕く者<グラント・クラッシャー

> と呼ばれる機能付き。能力の使用にはエネルギーを結構使用する。MWNB・MOONLIGHTとの違いはエネルギーの消費力で砕く者<グラント・クラッシャー>のほうが燃費がわるい。

レーヴァテイン

実剣。罪を切り刻む者<グラン・オルカ>と違い小剣である。

エルシディオン

レーヴァテインと対になる小剣。終らせる者<エンド・イフ>と同じ機能付き。

カイザー・ヴィエラ

HWB・ORCとほぼ同じ性能。だがこちらはエネルギー兵器。

クイン・ヴィエラ

カイザー・ヴィエラの実弾版MWHG・ORCとの違いはロングバレルであること(ハンドガンではなくライフルになった)そのため命中精度はHWB・ORCより良いが連射速度は少し落ちた。

**注意書きや設定（色々変わるかも）（後書き）**

色々設定が雑です。後々変わるかも、ゝゝ。

プロローグ Prologue (前書き)

最初の注意書きは読んだかな？読んだならOK。



## プロローグ Prologue

プロローグ

「どうしてこうなった。」

少年は1人部屋で呟く、、、。

ここはIS学園、、、。

ISは男では使用できないという前例が覆されてから一週間まさか俺まで入学させられるとは、、、。

少し前のことである。それは久しぶりに一緒に飲んだ後のことである。

「いやーまさか千冬の弟、、、一夏だっけ？まさかあいつもISを動かせるとはニューズ見たときビックリしたぜ。」

「無壊、まるで貴様も動かせるみたいな口調だな、、、。」

千冬はそうつぶやいた。だからだ、ああ、、、今思うとなぜ言ってしまったんだろう、、、。

「動かせるけど？」

俺は普通に答えた。今思うと、、、酔っていたのだろう。

「は？」

千冬は冗談はよせみたいな顔をしていたので。

「嘘だと思っただる？なら見せてやるよプリンガー!!」

まあ、、、そんなことがあります、IS学園にいます、、、。しかし制服か、、、変な感じだ。

「あ、ちなみに未成年での飲酒は基本だからな、お兄さんとの約束だぞ、、、俺は誰と話しているんだか、、、。」

また無壊は1人部屋で呟いた、、、。

「、、、ここが、、、IS学院。」

「IS学園ですよ霧幻。」

ここにも1人と1機この学園に入学させられた少年がいた、、、。

「あいつのせい、、、。」

さきほどの話の続きになるが、酔っていたであろう無壊と戦闘をおこなった、その時にふふ（笑）後は、、、察してください。

「まあよかつたじゃないですか家ができて（笑）」

相変わらず人を馬鹿にして、、、霧幻は心の中で呟く。

「私の楽しみの一つですからwww」

「おまえ、、、もうどうでもいい。」

霧幻は深いため息をついた、、、。

「ちよつとそこだなにしてるの？授業はじまるよー。」

遠くから見知らぬ女子が声をかけてきた多分いや、、、きつと

「女子だと思つてますよきつとwww」

「、、、いちいちうるさい。」

エグゾスを軽く叩いた。

「まあすまなかつたな。」

「話しかけるな。」

ここは教室の前正確には1年1組の前。

霧幻と無壊あの事件以来の再開、、、あれはいやな事件だったね。

「まあおたがい「聞こえなかつた?」、、、、。」

無壊はあきらめた、、、。

「・・・というわけで、おい入つてこい。」

呼ばれたので教室に入る見ると女子女子女子、、、とすげえなあおい。

「まずは自己紹介からだ。」

とにかく良い印象をもたれたいな、、、なんて考えていると。

「霧幻、、、。」

一言、、、それだけか？それだけでいいのか？

「ほかにはなにかないのか？」

千冬ですらツッコミいれたよ。まあそんなことはどうでもいいという感じで一言。

「、、、ない。」

く、クラスの空気が重くなった、、、。やりずれーな、オイ。

「そ、そうかじゃあ無壊自己紹介を、、、。」

千冬、、、ドンマイ。

「俺の名前は神崎 無壊だ。とりあえず一夏？だっけ同じ男同士仲良くやるつぜ、あとは分からないことが多いから色々教えてくれると助かる、、、。」

いや、、、、すくなくとも霧幻よりかは良い印象もたれたかな？

「、、、どこ？席。」

霧幻君きみはマイペースすぎやしないかい？ほら千冬もイラっとしてるし。

「ああ、、、後ろ二つあいてるから二人で決めてくれ。」

「、、、こつち。」

おい話聞いてなかったのかい？ま、席なんてどこでもいいか。

こうして俺たちの学園生活が始まった、、、。さきが思いやられる

プロローグ Prologue

(後書き)

なんだ、、これ色々酷いな、、向いてないのかなごういうの、、  
、そんなことを考える今日この頃です。

一夏達の視点 The viewpoint of Itika and ot

今度は一夏達？一夏視点かも、、、。

いきなり話を聞かされたときは混乱したな、、、。まさか俺以外にも男でISを動かせるやつがいたなんて、、、どんなやつなんだろうな、、、仲良くできるといいなあなんてことを考えていた。

少年の名前は織斑 一夏世界で初めてISを動かせる男としてニユースになった。

まあクラスの様子はと言うと、、、。

「うそ！！また男の子しかも二人も。」

「どんな人なのかなあ仲良くできるといいなあ。」

「でもさ？声明とかでてなかったよな？」

「このさいどうでもいいじゃん。」

なんて感じでクラスは騒がしいです。

「貴様ら、しずかにできないのか！！」

さすが千冬姉、クラスが一瞬にして静まりかえったよ。

「・・・というわけで、おい入ってこい。」

あれ？1人女性？なんてことを考えていると。

「霧幻、、、。」

あ、男だ、、、女性なんて思っでごめんなさい、、、。え？自己紹介終わり？

「俺の名前は神崎 無壊だ。とりあえず一夏？だっけ同じ男同士仲良くやるうぜ。」

「ああ、よろしくな。」

よかったこっちは仲良くやれそうだ、、、。

「、、、どこ？席。」

、、、霧幻自由人なんだなあ。しかもかってに座ったし、、、。こうして授業が始まった。

昼休み。

「へえじゃあ無壊って俺より早くIS動かせたのか？」

「一夏よく信じられるな。」

屋上で一夏と箒、無壊は弁当を食べていた。

「でも箒、無壊は嘘を言ってるようには見えなйдろ？」

「確かに見えないがだな、まだどんなISかって見てないだろ？」

「ああそれならなクラス代表決定戦ってやつにでるからその時な。」

無壊はそう呟いた。

「あーあと霧幻もでるらしい、、、。」

はあと無壊はため息をつく。

「変わったやつだよな。」

「変わってる？、、、あーその考えはなかった。」

無壊は納得してしまったようだ。

「私は無壊も十分変わってると思うぞ。」

「箒ちゃんは「ちゃんをつけるな変な感じがする。」手厳しいな、

、、、でどこが変わってる？」

「色々だ。」

「色々？」

箒具体的に言ってやれよ無壊困ってるだろ？

「一夏、、、俺変わってるか？」

「んん？ああ、、、普通じゃないかもな。」

ごめんやっぱ箒が正しいかも。普通質問しないだろ、、、。

「変わってる、、、か。」

そうしてまた授業が始まった、、、。

一夏達の視点 The viewpoint of Itika and ot

あんじゃこりゃあああああああああああ。なんか色々話し変わってるしもう、、、。



宣戦布告（Declaration of War）（前書き）

そろそろクラス代表決定戦です、。。

## 宣戦布告 Declaration of war

「いいか？よく聞け俺は面倒が嫌いなんだ、、、。」

俺の名前は無壊、普通？じゃなくて異端な高校生だ、、、。

いま俺は人生でもっとも無駄な時間の1つ、掃除のまっ最中なのだが、、、。

「面倒と言う暇があったらさっさとしぼってこい。」

箒、、、それが面倒なんです、、、。

「、、、行こうか？」

「おお行つてくれるのか？霧幻。」

やっとです神様、ついについて霧幻とコミュニケーションがとれました、、、。

なんてこと考えていると。

「そのかわり、、、銀狼の鎧になれ。」

「おいやめろ、馬鹿。それってあれだろ？あのふふつ（笑）の事件の時に小規模なクレーターをつくった粒子砲の名前だろ？」

「うん、銀狼でお前を撃ち抜きたい。」

「いや、死んじゃうから。」

「うん、死ぬ。」

「いやいや、まだ死にたくなーだーから、雑巾をしぼりにいけえええ。」今すぐ行つてきます。」

箒に叱られるし、雑巾しぼりにいかされるし霧幻怨むぜ、、、。

「いやー箒さん怖いですねーせつかくの可愛い顔が怒ると台無しですよ。」

「な、だ、誰だっ。」

箒、、、だっけ？顔赤い。

「ここです、ほら霧幻の指。」

そついうと霧幻はその指輪？を見せた。

「まさかISが？霧幻じようだ」「いや私ですエグゾスです。」「え、えええ。」

箒は動揺したそれはそうだろう、、基本は？普通は？ISはしゃべりません。

「変わってる？」

「どこから変わってるか話したほうがいいか？」

「いい、、分かってる。」

その時霧幻は少し笑っているように見えた。

「無壊に言つといて、決着、代表決定戦の時。」

箒はなぜ決着にこだわるのかな？と思いながら。

「ああ、伝えておく。」

と、言い返した。

その頃、、。

????「ふっふっふっふ、私の知らないIS、見に行かなくては、まっついてねちーちゃんとおむっくん。」

宣戦布告(Declaration of War)(後書き)

「???」(一発ですね?もっと分かりやすくするべきだったかな?)

一夏戦終了後、After the end of an Itikagawa

戦い後にしてしまいました、、。とりあえず一夏とセシリア戦は  
本編とまったく同じ展開です。そしてついに戦いが、、。

「あー、おしかつたな、、、まさか零落白夜で自爆とは。無壊は1人眩いた。」

「次は俺か、、、はあ面倒だ。」

そうこれは一夏が負けた後の話である。

「、、、シユール。」

ファースト・シフト

「いやー、一時移行できたんですけどね。」

「でも遅い、、、ついにか、、、。」

「楽しみですか？」

「うん。」

「そうですか、私も楽しみですよ久しぶりに本気を出せますから。」

「亡国機業のISは？」

「それよりもあの無壊さんのISですね、やはり格が違いますね。」

「そう、、、関係ない壊す、、、だけだから。」

「おお怖い怖い。」

久しぶり、、、か。たしかに楽しみだ。

コワシガイガアル。

「一夏初めてにしては頑張ったじゃねーか。」

「そうか、千冬姉の名前は守れなかったけど、、、。」

「、、、そうか？まあ捉え方なんて人それぞれだもんな、、、。」

「え？」

「まあ、、、と、次俺だったな。」

「無壊。」

「あ？なんだ？」

「勝てよ。」

「約束はできねえーな、相手は化け物だから。」  
「無壊もこの状況を楽しんでいる。」

「壊す、、、ねえ？わりーがよお俺がためえをぶっ壊してやるよ。」  
「あー楽しみだ、、、。心の底から思ったことである。」

「ついにか霧幻。」

「ああ、決着をつけよう。」  
二人ともISを起動させる。

「プリンガー！！」

プリンガーと呼ばれた機体はどことなく騎士の鎧に似ている。

色は白と青で武装はと言うと、、、。

「なにあれ？」

「大きい剣、、、だね。」

「機体と同じくらいの大ささだよ。」

会場がざわつく、、、まあそうだよなあ大きいよな。たいして霧幻は。

「、、、エグゾス。」

「メインシステム戦闘モード起動します。」

また会場がざわつく、、、。

「え？い、いまISが、、、。」

「しゃべったよねえ？」

「ISつてしゃべれるの？」

「な、なあ？千冬姉「今は織斑先生だ、、、。」あ、織斑先生ISが。」

「聞いたことがないな、、、しゃべるISか、、、。」

「？筈はあまり驚かないな。」

「まあ私は知っていたからな。」

なんて話してるなかそのISは姿を現した。

色は黒と赤で無壊のプリンガーと対になっている。





「はずした、じゃねーだろ殺す気か？」

「うん。」

笑顔がまぶしいなコンチクショー。

「次は、、、ない。」

「ちっ、、、。」

また刈羅とグリフォンの弾幕、、、そろそろこっちも攻めたいな、、、。

「いくぜ、プリンガー。」

「な、速度がいきなり早く、、、。」

「イグニッションブースト瞬時加速知ってるだろ？」

瞬時加速で一氣に無壊は距離を詰める。

「この距離なら、が、がはっ。」

距離を詰めた瞬間グリフォンをブレードモードにし、逆に無壊に大ダメージを与えた。

「近距離も得意だ、、、銀狼のチャージングはそのままで月光を、、、。」

「RRS - FENRIRを収納NB - MOONLIGHTをインストール。」

月光と呼ばれた刀は刀身は黒いが青く光り輝いている。

「なんとも幻想的な刀なことだ、、、。」

そした近距離戦にもちこむが、、、。  
強い、、、グリフォンと月光のラッシュに押されている、だが。

「うおおおおおおああああ。」

グラン・オルカでグリフォンごと霧幻を薙ぎ払う。

「な！一撃でここまでのダメージ!?」

霧幻は動揺した、過去ここまでのダメージを自分に与えた者はいなかったから。

「おらあどうしたああああ。」

「くっ、、、近距離では力負けしている、、、。」

月光で斬りかかってもあのでかい剣で薙ぎ払われる、なら距離を離

して!!

「逃がすかああああ。」

くっ瞬時加速のせいで距離を離せない、、、。

正直イラつときた、、、。

「刈羅、、、。」

「この距離でか？自分にもあたるんじゃない？」

「単一仕様能力発動、、、ディアボリックインジ悪夢の宴。」

「ワンオフ・アビリティだと？ってありかそんなの!!」

刈羅の弾幕がミサイルのように追尾してくる、、、。

「さらにおまけだ、単一仕様能力発動、、、グラヴィトン重力異状。」

な、、、こんどは機体が重く、、、。

「避けられねえ、、、。」

刈羅の弾幕が無壊を容赦なく襲う、、、。

おいどういうことだ、なぜ単一仕様能力を複数使用できる、、、そ

したら単一仕様じゃねえだろうが。

「銀狼チャージ完了、ディアボリックインジ悪夢の宴発動中だから避けられないな、今度

こそさようなら。」

「おいこのタイミングで撃つ奴がいるかああああ。」

「壊れる。」

また会場にグガアアオという音が響きわたる、しかも今度は追尾機

能付き。

「無壊!!千冬姉、早く止めさせないと無壊が死んじゃう。」

「だめだ、、、霧幻の回線につながらない。」

「まさか、わざと切ったのか？」

会場がまたざわつく。

みんなもうやめてなど言ってるが。

「知るか、死ぬ。」

霧幻にとってどうでもいいことだから、、、。

「ちったあ自重しやがれええええ。」

無壊はエンド・イフを持ち、叫んだ。

「モードグラウンド・クラツシャー、吹き飛びやがれええええ。」  
グゴオオオオガギイイイイイという騒音とともに相殺した、、、  
霧幻の最大の一撃を。

「な！？銀狼の一撃を相殺した？、、、化け物か？」  
だが無壊は相殺するさい機体のエネルギーをすべて消費してしまっ  
た。

「はあ、、、はあ、、、いいかよく聞け俺は面倒が嫌いなんだ、、、  
死ぬなんて面倒なことになるくらいなら負けてやるさ、、、。」  
「、、、お前の勝ちだ、、、俺の最大の一撃を相殺したから、、、。」

「そうか、、、じゃあ俺の、、、か、、、。」  
そこで無壊は気絶した、、、。

一夏戦終了後、After the end of an Itikaga

初めての戦闘シーン、、、。もう少し勉強しないと、、、。アド  
バイスとかあったらうれしいです。

絶対禁止 It forbids absolutely. (前書き)

戦い後です。ついに？あの人が登場します。

絶対禁止 It forbids absolutely.

何日寝てたんだろうな、。

無壊は目開けると知らない場所にいた。

多分保健室とかだろうと推測し、また寝ようとした。

「まだ寝たりないか？二日も寝ていたんだぞ、。」

？声がした気が、、しかもとっても殺意てきななにかを感じるんですけど、、。

「お、織斑、、先生？」

「無壊、、言いたいことは分かるよな？」

最悪だ、、無壊は心から思った。

怒ってるのは当然だよなああの試合のとき誰にも邪魔されたくなかつたから回線を切っていたのだから、、てかよお、普通使うか？あんな殺戮兵器、、と、とにかく謝つとかないと、、殺される。

「すすすまなかったこんどれだけ心配したと思ってる！！、、へえ？」

いや、予想斜め上でした。

「分かっているのか？あんなのまともにくらつたらお前でも、お前でもな、、。」

「すまなかった、、。」

久しぶりに見たな、、動揺している千冬、たしか、、あの時の事件以来だったな。

無壊のいう事件とは、数年前一夏がさらわれた時のことである。

あの時の千冬の動揺っぷりはすさまじかったな、、。いつもの威厳のある千冬はどこに行ってしまったんだ、なんて考えるほどだった。今なら分かるが、いや俺も冷静になっていれば分かったのかも。しれないな、動揺するのも当然だ、、。たった1人の家族、、なんだからな。

「分かればいいんだ、、。」

「、、、霧幻は？」

「あいつか？あいつは、、、。」

と、千冬が言うとドアが開く音がした。

多分、、、流れからして。

「やっぱりか、、、今はただ「分かってる。「ならいいけど。」

霧幻だった。手には、、、リンゴ？

「買ってきた、もういい？」

「霧幻、貴様がここまで派手にやったんぞ？わかっているのか？」

「、、、まだあるの？」

「あたりまえだ！！あと、あの銀狼は禁止だ。」

「絶対？」

「絶対だ、ほんとうならISを取り上げるところなのだが、、、。」

「なのだが？」

無壊も疑問に思っていた。千冬にしてはあまい判断だと。

「そうすると暴れるぞってこいつのISがな、、、。」

まさかとは思うが、、、。

「無人で動けるのか？」

「動けてしまうんだ、、、。」

もう人いらねーじゃんなんて考えているとエグゾスがしゃべりだした。

「いや要りますよ、霧幻がいないと単一仕様能力ワンオフ・アビリティが使えませんから。あとエネルギー管理とか私だけでは結構難しいんですよ。」

このエグゾスつてやつは、、、あの時もだったな、、、。

「てか、、、考え読めるのか？「いいえ、読めませんけど？」、、、。」

即答かい、しかもノーって答えたよこの子。

「なあ、疑うようでわrierがよおどうしてもそのの能力を持っているようにしか、、、。」

「同意見だが、、、ない、、、らしい。」

霧幻が言うなら本当なんだろうな、、、。

「おめえも苦労してるな。」

「慣れた。」

「で、霧幻、私の話はわかったのか？」

「、、、うん。」

「うん、じゃない。」

「、、、はい。」

「心配しないでください、このエグゾスが絶対に使わせませんから。」

「いや、余計心配だから。」

「ああ、、、たのんだぞエグゾス。」

「ほら千冬もちよつと複雑な顔してる。」

「まあなんだエグゾス、頼んだぞ。」

「あいにく女性以外の命令は聞く気はないんで、あ、無理なお願いもありませんけどね。」

「うぜええええ。」

「てめえ、、、。」

「イラッとしました？ねえいまどんな気分？、NDK、NDK。」

「があああ壊してええええめちやくちやいらいらするんですけど」  
のIS。

「エグゾス。」

「はいはいWWW」

「霧幻もさすがにまずいと思ったのかな？」

「はあ、、、疲れた。」

「私もだ、、、。」

「もう寝ようと思った時。」

「ちいいいいいいちやああああああん。」

「この声、、、まさか。」

「東？こんな「東さんダイブ」はあつ。」

「東は千冬に飛びつこうとしたが、飛びつく前にチョップされてしまった（笑）。」



「痛い、、、東さん泣いちゃうよ、、、。」  
「えーと、、、説明が必要、、、かな？」

このいかにも不思議の国のアリスにでてきそうな格好の人は篠ノ之東、ISを初めて開発した人物でいわゆる天才である。天才、、、だよな、、、。

「おう、東久しぶりだな。」

「やあむつくん、久しぶりだね。あいかわらず疲れてそうだね。」  
いや、実際疲れてます。かなり。

「東さんはこんなに元気なんだよ？だからむつくんも元気にならなきゃ。」

意味わからん。

ちなみにこの人は昔からこんな感じである、、、変わらないなあ。

「で？なにしに来たんだ、まさか私たちに会いに来たとかじゃないだろ？」

ああ、確かに。さすが千冬だ。

「実は、このIS学園にわた「はいはいそのISはここです、エグズスです。」ありや東さんが言おうと思ったのに、、、。」  
だから、なんで言う前に分かるんだ。

「と、いうわけでそのISを「帰ります。」って逃げるな！。」

霧幻は窓から飛び降りた。

「おいつて、、、展開早いな、、、。」

ISを展開させて、、、。しかし霧幻もか、、、。

「東さんから逃げられると思うな！。」

そして東もISに近い何かを展開させて霧幻を追いだした。

「千冬、、、。」

「なにも、、、いうな。」

二人はため息をついた。

くそっ、、、今日は厄日だ、、、。

霧幻はエグゾスを展開させIS?を展開させている束から逃げてい  
る。

「ふっふっふっ束さんから逃げられるとおもうなー。」  
たしかに、、、なら。

「逃げられないなら。」

銀狼を構える。撃たなければいいんだろ？

「ストップ、ストップそれは反則う。」

やはりか、、、銀狼の威力を知っている、、、か。

「束さんは暴力反対派だよ。」

意味がわからん。

「ダメですよ霧幻、禁止されてるんですから。しかもこんな可愛い  
女性にむかって撃つだなんて絶対ダメです。」

こいつもこいつで、、、。

「撃つ気はない、、、変なことをしなかったら。」

「じゃあ束さんに「断る。」うううケチー、けちけちけちー。」

ガキか、、、。

「じゃあなんで束さんに見せてくれないの？」

そんな目をされても、、、。

「信用できない。」

「、、、どこが？」

「全部。」

まじめに答えたつもりなんだが、、、。

「ひっどーい、世界中のみんな知ってる天才、束さんだよ？」

「どうでもいい、、、。」

「にゃあ、、、。」

しよげた、、、。

「霧幻今すぐ謝りなさい、今すぐ。」

「なんで？」

「いいから今すぐ。」

「理不尽な、、、ごめん。」

「じゃあ、見せてく」「ごめん」、、、やっぱり意地悪。」  
束はなにか思いついた表情になった。

「じゃあじゃあ、どうしたら信用してくれる？」

以外にも普通な質問、、、。

霧幻は少し考えこつた。

「すくなくとも、ISにしか興味がない奴は信用できない。」

束はきよんとした。

「ふえ？束さんは君にも興味あるよ？」

そして霧幻もきよんとした。

「いま、、、？」

「だつて君の過去とか調べようとしたけどでないんだもん。束さんそれが気になつてきちゃったんだから。しかもまったく知らないISだよ？見に行くしかないじゃん。」

本当は逆だろ、、、。

「わかつた」「じゃあ見せてくれるの？」考えとく。」

「ええ〜。まだ駄目なの〜。」

「、、、。」

「今度は無視！？ひどいよ〜。」  
なんか疲れた。

次の日

「よつ、あの後どうなつた？」

無壊か、、、。

「大変だつた。」

「わあ、、、言われなくても想像できる。」

俺も昔はよく振り回されたもんなんだから考える。

「いないってことは見せ「見せてない。」おーがんばるうー！。」

しかし、今日の霧幻はよくしゃべる。普段もこのぐらい話せるようになったらいいのになあ。

「おはよつてなんだか久しぶりなきがするな、霧幻が他の人というの。」

ちなみにあの試合のあとから霧幻に話かける人はかなり減りました。理由は、、、まあわかるよね？

「一夏、そういえば俺は聞いてないんだけどクラスの代表つて誰になつたんだ？」

「ああ、それ「一夏さんになりましたの。」セシリア、俺が説明しようとしてたんだから。」

そこにはセシリアがいた。

あれ？たしかセシリアと一夏つて仲が悪かった気が、、、しかも一夏さん？

「霧幻、、、負けたのか？」

「いや、霧幻は辞退したんだ。」

「そうなのか？」

「めんどくさかったから、、、ふうあああ眠い、、、。」

霧幻、御愁傷様、、、。

昼休み

「いや、、、気まずい。」

「ああ確かに、男少ないし、、、気まずいよな？」  
そこじゃない、、、。

いま、一夏と筈、セシリアに俺、、、と。

「一夏？本気で言ってるのか？」

「ん？なにが？」

いや、気づけよ。この二人おめえに気があるだろ？

まさかこいつ唐変木か？

「二人とも、、、頑張れよ。」

「な、何の話だ（ですの）」「」

二人とも同時に答える、、、青春してるねえ。

「どうしたんだ？ 箒、セシリア？」

今ので気づかないとは、、、これはかなりの唐変木だな、、、。

無壊は気まずさを感じながら四人で弁当を食べた、、、。

その頃霧幻は、、、。

「しつこいと嫌われるぞ、、、。」

霧幻は屋上で弁当を食べていた、、、束と。

「じゃあ「見せない。」「ちっがいまーす。」「

じゃあ、、、なんだ？

「君は「霧幻、名前も分からないのに話しかけるな。」「ひっどーい。」

またか、ぎゃーぎゃーうるさい。

「じゃあむっちゃんは「むっちゃんはやめてくれ。」「でもむっくん

だとかぶっちゃんうし、、、。」

「霧幻。」

やっぱり疲れる。

「しょうがないなあ、、、特別だよん。」

なにがだ？

「じゃあ霧幻はどうやってそのISを手に入れたの？」

、、、結局IS関連じゃないか。

「自分で、、、。」

「自分で？、、、まさか作ったとかいわないよねえ？」

一応天才か。

「嘘だあー、、、東さんは認めません。」

「親か、、、。」

「信じるかは、、、自由。」

「うーん、、、じゃあ、信じる。」

「変わってる、、、普通は信じない、、、。」

「少し、、、見直した。」

「じゃあ、昨日聞かせてくれなかった霧幻の「チャイム、、、行かないきゃ。」後で聞かせてね。」

「気が向いたら、、、。」

「霧幻は屋上を後にした。」

「霧幻か、、、東さん気にいっちゃったからね。」

「その時の束はいつも以上に楽しそうだった。」

絶対禁止 It forbids absolutely. (後書き)

長くなってしまった、、そしてすこしフラグを、、。

誤字などあったら教えてくれると助かります。

ちなみに銀狼とグリフォンは基本武装でエグゾスを展開させるとその二つの武装も自動で展開？転送されます。

## クラス代表就任パーティー Class representation a

最初の投稿速度はなんだったのだろうか、。。

そして、個人的に好きな話です。(とくにアニメ版はすごかった。)



「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう、。織斑、オルコット、神崎、霧幻。試しに飛んでみる。」

あ、なぜ千冬が霧幻のことを双月と呼ばないのかというと、双月とよんでも一切返事をしないからである。

まあ自己紹介の時も「霧幻、。。」と言っていたしな、。でもよお、名前でしか反応しないのも困ったものだよな、。ま、とりあえず、。。

「わかりましたわ。」

「りょうかい」

「、、。。」

ISが展開される、。、。一人を除いて。

「ええーと、、、たし「なにをしているんだ織斑!!」す、すみません。」

少し時間がかかったが一夏もISを展開できた。

しかし一夏いくらなんでも時間かかりすぎだろ、。、。

とりあえず4人ともISを展開できた。

「、、、よし、飛べ!!」

「はいっ!!」

「いくぞ、プリンガー!!」

「、、、エグゾス。」

「よし、いくぞっ!!」

一番は無壊、二番目は霧幻、三番目はセシリア、そして四番目は、。、。

「なにをしている織斑、ブリンガーならまだわかるがスペック上の出力では白式の方がブルー・ティアーズやエグゾスよりも上なのだぞ？」

「そう言われても、、、たしか、、、自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ？、、、よくわかんねえ、、、。」

「おい一夏、イメージはしよせんイメージだ。」

「自分のやりやすいイメージを模索するほうが賢明でしょ。」

「と、言われても、、、なんかコツとかないのか？そもそもなんでISが浮いてるのかすらまだ理解できていないんだぞ？なのにできるはずないだろ？」

「と、言われてもなあ、、、。」

「その、、、よろしければ放課後に指導してさしあげますわよ。」

「はあ？」

おい一夏、はあ？じゃねえーだろ。

「その時はふ「織斑、オルコツト、神崎、霧幻。急降下と完全停止をやってみせろ。」りよ、了解です。」

いやー千冬やってくれるなあ、、、。

「まあ、りようかい。」

無壊、霧幻、セシリアは地上に向かって急降下をした、結果は三人とも成功。

霧幻は土埃ひとつたてずに止まった。

どんな化け物だこいつ？なんて考えていると。

「私は優秀ですから。」

と、エグゾスは答えた、、、。

だから人の考えを読むなこの野郎、、、。

なんて馬鹿をやっていたら、、、。

ドオオオゴオオオオと爆音に近い何かか響き渡った、、、。音がするほうを見ると、、、。

「一夏さん！？」

「なにをしているんだ、、、。」

「おお、すごいなあ。」

「、、、シユール。」

くすくすと霧幻が笑ってる。すごい。

「出力は銀狼のほうが上ですね。」

「いや、競うなよ洒落にならねえーから。」

さきほどの音は一夏がクレーターを作り上げる音だった、、、。

小規模だがクレーターと呼ぶのにふさわしい円環状（ry

みんな駆けつけたのだが、、、。

「いつてえ、、、死ぬかと思った、、、。」

まあ元気そうだ。

「馬鹿者、グラウンドに穴をあけてどーする。」

千冬すこし笑いをこらえてないか？

「すみません、、、。」

「なさけないぞ一夏、私が教えてやったことをまだおぼ「大丈夫で  
すか？一夏さん、お怪我はなくて？」

「あ、ああ、、、大丈夫だけど、、、。」

いやーこの唐変朴め、ええーいもげるこんちくしょう。

「ぶっ、、、くっくっく、、、。」

霧幻まだ笑ってるし、、、。

まあ、こんな感じで今日の授業はにぎやかでした、、、。

あ、そうそうグラウンドを一夏が直しているときに聞いたんだが、  
今日一夏がクラス代表になったからそのお祝いをやるらしい。

霧幻は、、、来ないよなあ。

放課後。

「おい霧幻、今日一夏クラス代表就任パーティーやるらしいぞー、  
でるのかー？」

一応聞いておいたのだが、、、。

「俺がいると楽しめないだろ？、、、だから行かない。」

と、返されてしまった、、、。

「そんなことないなんていいきれないだろ？」ま、まあ。  
まあわかっていたが。

「さびしくないか？」

「慣れてる。」

「そうか、、、。」

それ以上言葉が思いつかなかった。

と、今度は霧幻が。

「なあ？あの兎の撃退方法知らない？」

なんて話をふってきた、なんか霧幻から話をふってくるなんて珍しいなあ。

「ああ？束のことか？まだ諦めてなかったのか、まああいつは飽き  
つぱいからそのうち来なくなるんじゃないか？」

「、、、そう。それはよかった。」

「んん？ああ、よかったな。」

気のせいかな少しだけ寂しそうに見えた気が、、、気のせい？だよな。  
こうして俺は霧幻と別れた。

そして、、、。

「」「織斑君クラス代表就任おめでとー。」「」  
パンパンとクラッカーの音。

いやーいつ聴いてもいい音だ、パーティーって感じがする。

「……織斑君、おめでとー」

パチパチと拍手、……いやー賑やかだ。

「なあ？なんでセシリアは辞退したんだ？」

いや、予想はついてるんだが。

「まあ、たしかに勝負はわたくしの勝ちでしたがしかしそれは考えてみれば当然のこと、なにせわたくしがあいてだったのですから。」  
おうおう、言うじゃねーか。ただ惚れただけなのに？

なんてことを思う無壊だった。

「それで、……大人げなく怒ったことを反省して一夏さんにクラス代表をゆずりましたの。」

そしてみんなで男子をもちあげなきゃなんて話をしている、……。  
こっちに飛び火しなきゃいいが。

「人気者だな、……一夏。」

あーあ、籌むくれてる、……。

「そう見えるか？」

逆に問うが見えないか？まあいい薬になるかな？なんて考えていると。

「なら無壊でもいいじゃないか？」

一夏、……なんてことをいいだすんだお前は。

「いいかよく聞け、俺は面倒が嫌いなんだ。クラス代表なんか絶対やらん。」

「えーじゃあ、……俺か。」

霧幻はまずいと思ったんだろうな。

「まあいいじゃねえか。」

「他人事みたいに言いやがって、……。」

まあ他人事だし（笑）

「どうもー新聞部です。」

おおそういう部活もあるのか？

「取材いいですか？」

まあみんなOKだすよな、、、。

「えーとまずは一夏君、クラス代表になった感想とかお願いできないかな？」

おおそしてべたな質問。

「え？ええ、、、と、、、その、、、が、がんばりたいです。」  
しーん、、、場の空気が凍りついた、、、。

「じゃ、じゃあ無壊君に質問ね？」

おい、何もなかったみたいな感じにするんじゃないねえ。

「無壊君はいつISを動かせるようになったのかな？あと声明がなかったんだけどどうして？」

「あー、政府は知らなかったからな、、、あと二年ほど前からかな？（適当）」

「じ、じゃあまさか一夏君より早くISを動かせたってこと？」

「そうなるな、、、面倒なことになりそうだったからばれないように生活してきたんだ、、、まあ織斑先生に見つかったのが運のつきでした。」

あーあーみんなざわつくな、、、。

「いやーそれは残念でしたね、じゃあ最後になにか一言コメントをどうぞ、期待してますよ。」

難しい要望だな、、、いつも通りでいくか。

「いいかよく聞け、俺は面倒が嫌いなんだ。面倒な奴は誰であろうとぶっ潰す、、、以上だ。」

「おお、こういうのを期待してたんですよ。」  
そうっすか。

「あ、あと霧幻君いますか？」

場が凍りつく、、、禁句だぜ、、、それ。

「あいつは調子が悪いらしくて来なかったんだ。（適当）」

「そうですか、、、残念です。」

知らないって怖いね、、、。

「じゃあ、、、最後に専用機持ち三人の写真を撮らせてもらいまー

す。」

いや、、、それは、、、。

「すみません、俺写真に写らないんで。(適当)」

「無壊君っておもしろいね。これも書いておこう。」

いや、うけ狙ったわけじゃないから。

「じゃあ、、、セシリアと一夏君二人で撮るねー。」

まあ、よかったなセシリア。

「じゃあ撮るよーはい。」

パシャッとシャッターがきられたのだが、、、。

「なぜ、全員はいつてますのー。」

いやー予想はしていた、、、。

「まあまああ」

「セシリアだけ抜け駆けは、ないでしょう?」

だよねー。

こうして一夏クラス代表就任パーティーは終わった、、、。

一方、霧幻はというと、、、。

「またか、、、。」

霧幻の部屋の鍵が開いていた、、、。

「やつほー東さんだよー。」

なんとなく日課になっている気がする、、、。

「また、、、不法侵入?」

「ちゃんとかーちゃんに鍵もらってきたよ?」

なにしていやるあのやるう、、、。

「そう、、、。」

「ねーねー霧幻、今日はパーティーあるって聞いたけど行かなくていいの?」

「興味ないから。」

「ふーん、もしかしてパーティーより東さんの「だから、興味がないだけ。」えー、つまーんなーい。」

「やーやーぎゃーぎゃーうるさい、、、、。」

「さっきの話題を持ち出してみよう、、、。」

「、、、無壊が言つてた。」

「ふえ？なにを？」

「飽きつぽいんでしょ？」

「うん、飽きつぽいよ。」

「そう、、、じゃあす「大丈夫、霧幻といるの楽しいから。」、、、どこが？」

心の底から思った。俺といて何が楽しいのか、、、。

「具体的には言えないけど楽しいよ。」

「まったく、、、信じられない、信じれない、だけど、、、いや、、、。」

「そう、変ってるね。」

「えー霧幻のほうが変わってるよー。」

「、、、わかってる。」

「変ってるんじゃないかってこういう存在なのだから、、、。」

「普通じゃないのが俺なんだから、、、。」

「だって、、、俺は、、、。」

「どうしたの？」

「、、、なにが？」

「なんか、悲しそうだよ？」

「、、、そう。」

「なにか嫌なこと言っちゃった？もしかして変わってるって言ったか



ら？」

「違う、、、すこしね、、、ごめん。」

「ありゃ？なんで謝るの？」

「エグゾス勝手に見てもいいから、、、。」

エグゾスを置いて部屋を出て行ってしまった。

「ちよつと霧幻、、、。」

しばらく束は黙っていた、そして束はエグゾスに質問した。

「ねーねー、えつきゅん聞きたいことがあるんだけど？」

「はい、答えられる範囲であれば、、、あといつえつきゅんになったのですか？」

「なにかまずいこと言っちゃったかな？」

「答えるならNO、です。と、いうかスルーですか。」

「じゃあ、なん「照れ隠しじゃないですか？」え？」

「でも。」

「それが知ってしまったときのことを考えてしまったんでしょう。」

「知る？えつきゅんを解析しても束さんは遊びにくるつもりだよ？」

「いえ、そのことではなくて、、、。」

束は何のことなのかな？と考えている。

実験体I-AZ-001、、、。

それが、最初の名前。

そして、父親がつけた名前ナンバーである。

## クラス代表就任パーティー Class representation as

あれ？なんか中二病全開＋暗い話になってもうた、、。

誤字やここはこういう表現じゃないの？みたいのがあったら教えてくれると助かります。

**霧幻のわりと忙しい日常／comparatively busy every**

8話というか番外編です。完全オリジナル？ストーリーですグロい表現注意。

あと、とっても？暗い話です、。あと見なくても平気な話です。

ここは、夢、、、。

霧幻は夢かどうかを認識できる、、、。

ああ、あの時の夢か、、、。

暗い部屋、よくわからない機械、そして

台に縛られる自分。

「まずはこの強化剤を、、、。」

たしか筋力強化剤だっけ？

霧幻は夢をみながら昔を思い出す、、、。

注入のしかたは、、、首をメスで斬り直接注入する、、、。

「あがああああ、痛い痛い痛いいいいい。」

次にやったのは、、、ああ強制的に色々なことを覚えさせる機械。

学習装置？だっけ？脳に直接電波を送って覚えさせるとかで、、、

あれも痛かった、、、はず。

「やだやだあああああああ。」

、、、今は分からないな、、、痛いつてどんな感覚だっけ？

ああ、痛いつて感覚はいらなくなってことで消されたもんな、、、。

まあ痛いつて感覚だけ。よかったこと、、、かな？

ほかに、、、。

「あ、、、学校。」

霧幻は自分の意思で起きた、、、。

学校、、、。

今日は家庭科？ってやつでみんなで料理を作るらしい。  
料理は得意だ。

「しかしよお、この学校の男子はみんな料理が得意なんだなあ、、、」  
「。ちなみに一夏と無壊も得意である。」

「でも、霧幻は意外だったな、、、な、無壊？」

「ああ、なんかできなさそうだもんな。」

、、、むかつく。

「人を見かけで判断するな。」

「おお、わりいわりい。」

ちなみになにを作るかは自由らしく俺の班は、、、ケーキである。  
無壊の要望だ。

「あ、霧幻イチゴ切っというて。」

「すまねえな、俺は生地を作ってるから、、、。」

「別に？平気だけど。」

普通に切っていた、、、あ、ザクって、、、。

「どうなった、、、て！？霧幻、指、指切ってるー！」

「は？そんなにつっておいしいいいい。」

「うん、骨が見えてるだけ。」

「だけじゃねえええ一夏保健室に連れていくぞ!!」  
「あ、ああ霧幻痛くないか? いや、痛い、、、よな。」  
「平気、、、。」  
「いや?どこがだ!! ぜってえ痛てえだろ。」  
血が流れているがそんなおうげさな、、、たしかに指に不快感はあるが、、、。

死ぬほどの出血ではないだろ、、、。

保健室。

針を縫うほどだった。

「本当に? 本当に? 痛くなかったの?」

何回も何回も先生が質問してくる、、、たしか山田先生。

「、、、はい。」

「いや、おかしいだろ!!」

一夏なぜそこまで興奮している?

「おめえ、なんかの病気か?」

はあ、、、教える理由もない、、、。

「それは私も気になるな。」

織斑先生までもか、、、。

「なにがですか? 織斑先生。」

「色々だ、まず痛いって感覚だけなのか?」

一応、うなずいた。

「そうか、、、じゃあ病気か?」

首を振った、、、。

「じゃあ、なぜ?」

「、、、。」

霧幻は立ちあがった。

どうでもいいだろ、、、関係ないんだし。

「ありがとうございました。」

「おい、まだはな「多分無駄だ、、、です。」、、、、そうだな。」  
霧幻おめえの過去になにか？

霧幻の謎が深まるばかりだった、、、。

「エグゾス、単一仕様能力、ワンオフ・アビリティ完全治癒能力」

「、、、了解しました。」

リ・バーサラー完全治癒能力と呼ばれる能力を発動したら完全に傷がなくなった、

。針を縫った形跡も含めてすべてなくなってしまった。

「簡単に直るのになんで心配するんだろ？」

、、、エグゾスはなにも答えない、エグゾスも分からないのだろうか？

「難しい、、、。」

霧幻は1人呟く。

あなたにはいつか理解してほしい、、、なぜ皆が霧幻を心配したのかを、、、。

エグゾスは願った、、、いつか分かる日が来ることを、、、。

自室、、、。

今日も開いている、、、エグゾスを解析させてあげたのに。

なぜ？そうして考えた末こういう結論にでた。

まあお別れのあいさつにでも来たのかな？

霧幻はそんなことを考えていただが、束はいつも通り遊びに来ただけなのである。

「やつほー束さんとーじょー！！」

「そう？、、、じゃあね。」

霧幻はお別れのあいさつをした。

「って今来たばかりなんだよ。」

「、、、もう用事はないだろ、、、。」

「ん？用事なんて無くっても来るつもりだよ。」  
へ？

また霧幻は分からなくなる、、、。  
なぜ？わからない。

わからないわからないわからないわからない、、、。

「あ、ちーちゃんに聞いたんだけど、、、。」

「、、、、なにを？」

「指ざつくり切ったって聞いたよ平気、、、平気じゃないよね。」  
「だーかーら、死なない程度なのになんでこんなに心配する。」

意味が分からない。

「リ・バーサラ完全治癒能力で直した。」



そういつて指を見せた。

完璧に直っているだろう心配する必要なんてない、、、。なんて考えていたら思いもよらぬ回答が返ってきた。いや、普通なのだが霧幻には理解できなかった。

「関係ないよ、すごく心配したんだよ!」

霧幻はますます分からなくなる、、、。

なんで、、、?簡単に直るのに?

「心配、、、?」

「あたりまえでしょ、、、聞いたときものすごくびっくりしたんだから、、、。」

えーと、、、なぜ?泣く、、、。

「泣くな、、、。」

「ばかあ、、、霧幻のばかあ、、、。」

束が泣きやむのを待つ、、、。

「、、、なにか飲む?」

「にゅつく、、、いい、、、。」

まだ、、、泣きやまないのか、、、。

しかしよく泣けるなあ。

「ごめん、、、なんで泣いてるか分からない。」

知りたいと思った、、、理解できなくてもいいから。

「、、、しゃっきもいったよ、、、。」

口調が、、、。

「、、、心配?したから?」

「うん。」

やっと落ち着いてきたか、、、。

「そんなに?」

「心配しすぎて耳がピンってなりそうだったよ。」

うーん、一番分からね。耳って頭の?

たしかに垂れてるけど、、、。

「やっぱり難しい、、、誰かに心配されたことがないから。」

「じゃあ、束さんがいっぱい心配してあげる。」

ごめん、それが一番心配。

「ありがと、、、。」

「え？いまなんて言ったの？」

束はいつきに笑顔になった。さっきまで泣いていたのが嘘のようだ、  
、、、。

「もう、、、いわない。」

「えーけちー、束さん凄くがっかりしましたよ。」

「はいはい、、、何か飲む？」

「うん。」

気づいたら霧幻も笑顔になっていた、、、。

その後のことである、、、。

千冬と無壊、そして束がいた、、、。

「なあなんで俺の部屋？」

「いいだろ別に、それとも人に見せられないものでもあるのか？」

「ねえーけどよお、、、。」

「ねえちーちゃん見つかったの？」

「分からないが、、、とりあえず。」

「あ？これ結構昔の新聞じゃねーか。」

とある一枚の新聞そこに書かれていた内容は、、、。

「人体実験？、、、ひでえな自分の子供で試したのか？でもこれと霧幻のかん、、、まさか？」

「まだ分らない、、、もしかすると、、、だ。」

「ちーちゃんこれ、本当のこと？」

「ああ、本当だ。」

「今すぐばらばらに引き裂いてやりたいね、、、。」

「たしかに、同じ名字だし、、、名前でしか返事を返さないのも納得できるが、、、。」

「絶対、許される行為ではないな、、、。」

千冬、無壊、束の3人は黙りこくってしまった、、、。

双月 秦

自分の子供に自身が考えた改造手術を施す、、、。

その改造手術のおかげですべてにおいて完璧な絵に描いたような人間をつくだすことに成功。

だがそれでも物足りずさらなる改良を加え、ついに実験体のほうが持たなくなる、、、。

拳句の果てに改良に改良を加えた実験体を破棄、、、。

その後、、、行方不明に、、、。

**霧幻のわりと忙しい日常／Comparatively busy every**

あくまで、番外編だと思います、。。

ちなみに直すは誤字ではありません、あくまで霧幻は自分を機械の  
ように捉えているからです。

誤字やここはこういう表現じゃないの？みたいのがあったら教えて  
くれると助かります。

単一仕様能力の説明（読まなくてもいいよー）（前書き）

ワンオフ・アビリティ  
単一仕様能力などの説明です。

本当に本編と関係ありますが読まなくてもいいものです。

単一仕様能力の説明（読まなくてもいいよー）

無壊「と、いうことでエグゾスの単一仕様能力ワソオフ・アヒリデーの説明だ。」

エグゾス「今回は本編と違う書き方です。」

霧幻「シユール？」

無壊「知るか、まあとりあえず説明いってみよう。」

霧幻・エグゾス「りょうかい。」

ディアホリックエイジ  
悪夢の宴

自身が放ったエネルギー弾を意のままに操れるようになる単一仕様ワソオフ・アヒリデー能力。

使い方は簡単で〇〇に当てたいなどでそのものを追尾するようになる。

無壊「なるほど、だから俺にしか当たらなかったのか。」

霧幻「簡単でしょ？」

無壊「簡単だったのはわかったから銀狼とは合わせるなよ？」

霧幻「約束は、、できない。」

無壊「いや、駄目だからね。」

エグゾス「まだまだ、あるんですから。」

無壊「おう、そうだったなじゃあ次の説明いってみようか？」

重力異状グラビイテン

実際はなんも変わってないのだがバツシフ・イナーシャル・キャンセラPICに異常がおこるため重力に異常が起こった感覚になるだけ。

無壊「ずいぶんとかわいらしい能力じゃないか？」

霧幻「、、、、そう？」

エグゾス「PICバツシフ・イナーシャル・キャンセラに異常を起こすって地味にすごいんですけどね、、

、。  
」  
無壊「ああーそうか、、、それってすごいじゃなくて、危険だな。」  
エグゾス「まだまだ、完成していない能力の一つなんですよ。」  
無壊「一生完成しなくてええは。」  
霧幻「次、、、どうぞ。」  
無壊「それ俺のセリフ。」

リ・バーサライ  
完全治癒能力

能力名通りどんな怪我でも無かったことにできます。  
霧幻が怪我をしても気にしなくなってしまう理由の一つ。

無壊「おいしいいいい、ふざけんじゃねええええ。」  
霧幻「お気に入りの能力。」  
無壊「エグゾオオオオオオ！おめえのせいじゃねえか。」  
エグゾス「は、反省はしていますよ。」  
霧幻「なんで？とっても便利な能力だよ？」  
無壊「少し黙ってる霧幻。」  
エグゾス「まあ、、、じ、次回に登場する能力の紹介。」  
無壊「逃げんじゃねええええ。」

ロスト  
永久の楽園

エグゾス専用の絢爛舞踏である。  
専用なだけあつて他者のエネルギーは増幅できない。

無壊「ざっけんなああああ。」  
霧幻「やったね銀狼が連射できるね。」  
無壊「なにそれ？超悪夢。」  
エグゾス「これを使用するとき両手に銀狼を持ちます。」  
無壊「なにそれ？超悪夢。大切なことなので二回言いました。」  
霧幻「最大出力で撃てるね。」

無壊「はい？いま聞き捨てならない言葉が聞こえた気が、、、。」  
エグゾス「本気をだせば一県ぐらいならARETEIに変えられますよ。」

無壊「ARETEIに？じゃあ、、、俺の時、、、。」

霧幻「出力抑えめ、、、。」

無壊「嘘だあああ。」

エグゾス「まあ、こんな感じのもたまにはいいでしょ？と、いうわけです。」



単一仕様能力の説明（読まなくてもいいよー）

（後書き）

最後で衝撃の真実、、、。

完全開放の時の銀狼なんて名前にしようかな、、、。

誤字があつたら教えてくれると助かります。

タイトルでわかるよね？

前回のイベントで少し霧幻に変化が、、。

あと、今回霧幻が（いろんな意味で）暴れるぞ。

「ここにいつが、、、待ってなさい、、、。」

「一夏。」

朝、食堂。

いつも通り霧幻は一人で食事を取ろうと思っていたのだが、、、。

「おはよつと、、、。」

霧幻の隣に無壊が座った。

「Good morning。」

「はあ?。」

無壊はさっそくなにかいろいろ違和感を感じた。

「ど、どうした?。」

「What?。」

What?じゅあねーだろ!!

「頭でも、、、打ったか?。」

「Although not struck。」

日本語で頼みたい、、、。

「なあ、、、日本語じゃ駄目か?。」

「Dann ist es deutsch。」

「今度はどこの国だ？」

「Non capisco tedesco, anche? Po  
i l'italiano?。」

「だから、わからんつ。」

マジで霧幻の様子がおかしいぞ、東なんか変なことでもしたか？

「、、、文句の多い奴だ、、、ごちそうさま。」

は？はやっ！！さっきまで俺のほうが食べてたのに、、、。

「学校、、、遅れる。」

「え？あ、あーそうだな。」

無壊は朝から頭が痛くなった、、、。

「霧幻ってわからん、、、。」

とりあえず、、、食堂を後にした、、、。

「って、感じだったんだ、、、。」

無壊は朝の出来事を一夏に話した。

「なあ無壊、いくらなんでも嘘にしか聞こえないぞ？」

「いや、ほんと? C? mo lo hizō?、、、な?」

一夏は口をぽかんとあけている、、、。

「????? ????」

次は韓国語か？

「霧幻なんか変だぞ?」

一夏、なんかじゃなくてとても変だ。

「、、、韓国語だよ？」

そこじゃない！！

「なあ？本当になにがあつたんだ？」

「、、、気まぐれ？」

こんな、返答がかえってきました。

一夏と俺はため息をついた、、、なんかまじ疲れる、、、。

「そういえば、そろそろクラス対抗戦だよね。」

なんて女子たちの会話が聞こえた。

そして一夏のまわりに女子たちが集まりだした。

いや、いい眺めですなあ、男としては。

「そうだ！二組のクラス代表が変更になつたつて聞いている？」

「ああ、なんとかって転校生に変わったらしいよ。」

へえ、こんな時期にか、、、変つてるなあ。

話を聞いてわかつたのは、、、。

中国から来たということ、、、だけか？

情報少ないなあ、なんて考えていると。

「その情報、ふるいよっ！！」

そこには胸を張っている少女が、、、まあ張る胸はないが、、、。

「二組も専用機持ちがクラス代表になつたの。」

へえ、つてことは、、、お前なんだろうなあ。

「そう簡単には優勝できないから。」

霧幻だつたら誰も勝てなかつたな、、、。

「鈴、、、お前鈴か！？」

「一夏？しり」そうよ！！中国代表候補生、フヤンゼンイン 鳳鈴音今日は宣戦布告

にきたわけ！！」元氣いいなあ。」

俺はあきらめる。

そしてざわつく、慣れてきたなあこの流れ。  
そして例にもよってあの二人も。

「だ、誰ですか？一夏さんと親しそうに。」  
言いにくいだが、、親しいんだろ。

箒は口には出していないが、、そうとうきてるな。

「鈴、、。何かっこつけてるんだ？すっげえー似合わないぞ。」  
一夏それけっこう失礼じゃね？あ、でも俺の発言（心のなかで）  
のほづが失礼か。

「な、、なんていうことをい（ガッツ）いったあ、、なにすん  
の！！あ、、。」

そこには魔王もとい冥王様が。

「もう、SHの時間だぞ？」

千冬降臨、、まじタイミング神。

「ちっ、チフユサン、、。」

「織斑先生とよべ、、。」

「はいっ！！！」

しかも、知り合いかあ、、声が震えてるぞおー。

「と、とにかくまたあとでくるからねっ、逃げないでよ一夏！！、、  
、ふんっ。」

少女は教室を後にした、、逃げるように。

しかしなあ、一夏よ？

「あいつが、、代表候補生？」

まあ、こんな様子だし後でもいいか。

昼、食堂。

「つーことは二人は知り合いだった、てなわけか？」

「そうよ、」

あーたすけてーだれかー。

俺はいまこの唐変朴と鈴つて子と食べているんだが、

気まずい、非常に気まずい、つーか気づけこの唐変朴！

「なあ？無壊、あんまり箸が進んでないぞ？」

おめーのせいだろうが、まあ正確には鈴のせいだが。

「んん？そのことねーぞー。（棒読み）」

そして一夏がなぜIS学園に入学したのかの話、ん？なんか違

和感が、なんだろ？この感じ、なにか大切ななにかが、

「ふーん、変な話ねー。」

「ああ、俺もなんで動かせるのかがいまだにわからないんだよなあ。

」

わからない？、、、どういこ（ダアン）。

と、机をたたく二人。

救世主ここに現る、、、だな。

「一夏そろそろ説明してほしいのだが、、、。」

ついに耐えられなくなった二人がこちらにのりこんできた。

「そうですね、一夏さん！ま、まさかここここちらの方とつきあ  
つてらっしゃるの？」

「べべべべつに、わたしは。」

「そうだぞ、ただの幼馴染だよ、ん？鈴どうかしたか？」

はあ？鈴どうかしたか？じゃねーだろ。

「、、、なんでもないわよ。」

さすがにわざとじゃないかと疑いたくなるレベルだなあ、、、。

おっとそろそろ時間だ。

「てか、もうチャイムなるぞ、、、。」  
「、、、へえ?」「」「」  
おめえーら、よお、、、。  
「やっべえー、まだ食べ終わってねえー。」  
「だらしないぞー、一夏。」  
「な、なんで食べ終わってるんだー。」  
いやー二人が来てくれたから箸が進む進む。  
こうして、食堂を後にした。

放課後。

一夏の特訓に付き合うことにしたのだが、、、。  
「霧幻もか?」  
そう、霧幻もいるのだ、、、ビックリだね。  
「、、、エグゾスが。」  
ああ、そういうこと。  
「、、、練習?」  
お、そうだった。  
「一夏れ、、、。」

そこにいたのは打鉄を装備した箒だった。

「今日から私もESで訓練に付き合う。」  
俺は、、、いらぬいな。

そしてセシリア&箒Vs一夏となっていた。



「あーがんばれ、一夏。」  
どうしたものか、、、暇になってしまったなあ、なんてことを考えていると。

「じゃあ、RRS - FENRIRなしで一戦やってももらえないでしょうか?」

と、エグゾスが声をかけてきた。

RRS - FENRIR? ああ銀狼のことか?

「銀狼抜きならいいぞ。」

「ありがとうございます。」

エグゾスって性格が少し問題なだけなんだな、、、。

「どこがですか?」

あー、それだ。

「とにかく、やるうぜ。」

たしかクラス代表決定戦以来だったな、、、こうして霧幻と戦うの。

「じゃあ、いくぞ!!」

「、、、こい。」

バトルスタートなんだが、、、。

「ちっあいかかわらずちよこまかと。」

エグゾスは刈羅とグリフォン、そして新しい?武装でこちらに攻撃をしてくる。

実弾兵器も装備していたとは、、、。

「エグゾスは遠距離主体の戦法だったな。」  
「、、、どうする。」

なら、あの時と同じ方法で、、、。

「ブリンガー、、、イグニッションブースト瞬時加速。」

「なら、、、ワンオフ・アビリティ単一仕様能力、ヴォルカニカ大爆撃。」

「ヴォルカニカ大爆撃？ん？ちよ、エネルギーを一か所に集中させて？まさ（キイイインンガアアア）」

そしてドーン、、、おわかりいただけだろうか？

一か所に（自分の前方に）エネルギーを集中そして爆発させる広範囲攻撃である、、、。

しかし自分にも被害がおよば、、、そこまで甘くはなかった。  
霧幻は刈羅のエネルギーフィールドで自分へのダメージを完全に遮断した。

「、、、接近戦にもちこめねえ。」

「もう一回、、、ヴォルカニカ大爆撃！！」

また大爆発、、、やべえ。

「次くらったらアウト、、、だな。」

「いや、これ以上エネルギーが持ちませんから！！」

エグゾスの叫び。いやしかし。

「お、まじか？」

これはいいことを聞いた。

「つまり、ここから本番ってこ」ワンオフ・アビリティー「単一仕様能力、永久の楽園」ロスト  
「！！」ワンオフ・アビリティー「また単一仕様能力か！？お、おい、、、マジか。」

絶句するのも当然である。俺の機体にこう表示されているのだから、  
、、敵エネルギー全回復と。

「エネルギー全回復を確認。」

「え、なにこれ？俺何もできずにおわ」ヴォルカニカ「終わりだ、大爆撃。」ヴォルカニカ「ぐあ  
ああああ。」

銀狼の時と違い普通にシールドエネルギー0、、、気絶もなし、、、  
と。

あー、あれだな、、、。

これはひどい。

「いやー、すみません昨日開発したばかりの単一仕様能力なんです」ワンオフ・アビリティー  
よ、この大爆撃って。」ヴォルカニカ

「そうなのか、、、じゃあ永久の楽園は？」ロスト

「もともと、、、。」

「そうなのかー。」

これってあの時手加減されてたんじゃないかな？

「もちろんですよ、そもそもRRS・FENRIRの最大出力だと  
日本で言う、、、東京ぐらいなら一発で荒地地に変えられますよ。」

「はあ？」

それってもう、核じゃないか？

「まあだいたいですけど、、、。」

いや、それまじで核だろ！！

「ですがRRS-FENRIRはまだ未完成ですよ？」

「いや！？あれで？嘘でしょ？」

「出力調整が難しい、、、。」

あーよかった、まだ威力足りないとかぬかすかと思った。

「それはないですよwww」

エグゾス、おまえがどうか。

「結構時間がたった。」

あ、そういえばそろそろ飯か。

「そうだな、一夏は、、、ほっとくか。」

あのはは、、、一夏は鈴にビンたされ「馬に蹴られて死ぬ。」と鈴と、箒に言われたと。

まあ自業自得、、、だな。

夜、霧幻の部屋。

「あれ？」

霧幻は一人呟く。

普段なら束が来ている時間なのだが、、、。

「いないですね？」

そう、今日はいないのである。

「静かだ、、、。」

いつもと違いとっても静かである。

しばらく時間がたった、、、が来る気配がしない。

そう、、、静か、、、望んでいた、、、はず、、、なのに。  
なんで、、、こんな、、、気持ちに、、、。

「寂しいですか？」

「は？、、、うれしいよ。」

前みたいになっただけ、、、寂しくなんか無い。

誰から見ても霧幻は寂しそうな表情をしていた。

「おくれて登場！！みんなのアイドル東さん！！！」

いきなり窓から入ってきた。

「なんだ、きたのか。」

そんなことを言ったが霧幻は嬉しそうだった。

「ひつどーい、東さん来なくなっちゃっよ。」

、、、それは。

「そう、、、すこし、、、寂しくなる。」

「へえ？今、いまいま！！！」

東はいまの発言にくいつく。

「なに？」

「寂しいって、寂しいって言ったよね？」

「まあ。」

「本当！やったー。」

そついうと束はくるくると回りだした。

「なにが、、、うれしい？」

霧幻はわからなかった、、、。

「だって束さんのこと認めてくれたんでしょ？でしょ？」

それを聞いて初めて理解した、、、なんでこんな気持ちになったのかを。

「そっか、、、。」

「ふえ、、、違うの？」

束はガクツとしたが。

「いや、、、認めた。」

その一言で再び束のテンションが上がる。

「本当に本当？」

「、、、うん。」

霧幻はだんだん恥ずかしくなってきた。

「もう、、、言わない。」

「えー、なんでー。」

「、、、言わない。」

「いいじゃん、いいじゃん、東さんはもう一回くらい聞きたいなあ。」

「

「言わない」「ぷー、でも一回聞けたからいい、、、かな。」、、、  
そう。」

二人とも顔がすこし赤くなっていた、、、。

「ケーキ、、、ある。」

「え、ほんとー？東さんも食べていい？」

「ちゃんとある。」

「ありがとうー霧幻。」

「、、、どういたしまして。」

「こういうのも、、、悪くないな。」

「こうして夜が明けていった。」

二人目の幼馴染〜Two-person Sakka's childhood

最後は書いてる自分が恥ずかしくなってきた。

ちなみに実弾兵器<sup>〃</sup>オルクです。戦闘シーンの省略<sup>〃</sup>大爆撃<sup>ヴォルカニカ</sup>でした。

誤字やここはこうという表現じゃないの？みたいなのがあつたら教えてくださいと助かります。



休日(Holiday) (前書き)

主「なんかピーンとききました。」

霧幻「そう、、、。」

主「霧幻君は反応が薄いなあ。」

霧幻「前書き、、、だよな?」

主「リアトモに言われたから参考にしてみた結果がこれだよ!!」

霧幻「どうでもいい。」

主「今回から前書きをこんな感じにしてみたいと思います。」

霧幻「変だったら、、、おしえて。」

主「今回の話もほぼオリジナルだってヴァ。」

霧幻「、、、休日?」

主「そう、休日さ!!ちなみにクラス代表戦は次回ぐらいかな、、、。」

霧幻「早くしないと、、、セカン党が。」

主「わーわー、わかってるって。」

霧幻「これ以上は、、、長いから、、、終わり。」

## 休日(Holiday)

場所 ショッピングモール。

「千冬よー、なんで俺までつきあわされるんだ。」

俺の名前は無壊、IS学園にはすげえーつえーや、、、なにやってるんだ俺は、、、。

しかし、、、なんでこんな時期に水着なんて買うんだ？

ちなみに今は春です。

「夏にな、、、学校の行事で必要になるんだ。」  
「そうっすか、、、。」

「あー、つまり荷物持ち？」

「まあ、そうなんだが、、、その、、、なんだ、、、。」  
「どうしたもじもじして、、、。」

あー皆さんは知るはずないでしょうが俺は昔千冬に告白したことがあります。

結果？ふっふっふ、、、死にたくなつた。

まあそれが気に入られていまこんな感じの関係だ。

あれだ、恋人未満、親友以上。

で、いまごろそういう反応されてもなあ〜ねえ？

「とにかくだ、付き合ってもらっぞ。」

「まあ、拒否権はもともとねーだろ。」

こうして無壊は買い物に付き合わされることになった。

そうしてここにも、1人振り回される少年が、。。。

「ねーねー霧幻「人前平気なの？」だいじょーぶだよん。」

霧幻と束である。

ちなみに束がいつてみたいお店があるとかで、。。。

「霧幻はいや？」

「人ごみを見てると銀狼撃ちたくなる。」

「駄目、ぜーたい駄目だよ!!!」

わかってます。

「。。。。平気。」

「撃って平気ってかん「撃たないって意味。」なーんだ、束さんビツクリしちゃったよ。」

この口調からは分かりにくいかもしれないが束は結構焦っていた。

「。。。。おもしろい。」

「ま、まさか束さんをからかったな。」

まあ、霧幻は束をからかっていただけなのだが。

その頃の無壊たちは。

「どんなのが私にあう？」

「は？。。。。俺に聞くんかい!!!」

男に聞くとは、、鬼教官。

「いま、失礼なことをかんがえていただろ？」

「いや、全然。」

おーこえー。

「んー？、、。」

無壊はこんなことを考えていた、一夏が好きそうなのってどれだろ？

じつは無壊は千冬がブラコンだと思っているのだ。

そういう理由で断られた、、と、信じているからだ。

そじゃなかったら、、穴に埋まっちゃいますよ。（冗談だからな。

）

「で？どれがいいと思う？」

あいつは意外とむつつりだからな、、これかな？

無壊が選んだのは黒いビキニだった。

「、、、あいつが好きそうなやつだな。」

「そーかあ？けっこう似合いそうだなーと思ったただけだぞ？」

「まあ私もこれとアレでなやんでいたからな、、。」

アレってやつを見たんだが、、対極的だな、、。

まあ、説明はだるいからなしで、、とりあえず白いビキニだ。

「お、さっそく購入か。」

しかし一夏のこと好きだな、、あいかわらず。

無壊は心からこう思った、、一夏になりてえ、と。

その頃の霧幻御一行。

「どこ？」

「うんうん、ここだよー。」

ケーキ屋、さん。

「きてみたかったんだー。」

「、、、タベボウダイ？」

「まさか霧幻食べ放題しらないのー!？」

「、、、初めて。」

霧幻はあまり外食をしないのでこういうのを知らないのである。

「お金はらうと好きなだけ食べられるよーってところなんだよ。」

へえ、、、だから食べ放題。

「楽しみ。」

「なにたべよーかなー。」

霧幻と束はお店に入った。

その頃の無壊達。

「、、、おい。」

「どうした？無壊。」

「買いすぎだろおーが。」

それはもう、服服服、、、。

「いやー荷物持ちがあると助かるな。」

「そうかい、、、てか昼だぞ？」

「ああ、そうだな。どこかで食べるか？」

「あー、、、。」

「どうした？こんなに荷物を持たせてるんだ、飯ぐらい奢るぞ。」

「そうか、、、ならなあ、、、いいか。」

こうして無壊達も店に入った。

そして夜。

「無壊？」

「ああ？霧幻か。」

無壊と霧幻は食堂にいた。

「つかれてる？」

おお、心配してくれてるのか？

「、、、色々あったんデイス、、、。」

「そう、、、ご愁傷様。」

「あ、、、なんか泣けてきた、、、。」

「コショウのせい？」

「、、、お前のせいかい!!！」

。コショウのふたがとれて中身が全部でるといっ漫画てき展開に、、、

「けふっ、けふっ、、、今日は厄日だ、、、。」

「じつじて一日が過ぎて行った、。。」

時間????場所?????

二人の人影があつた、。。。

「ねーねーねー」

「なんですか?」

「AZ-001が敵になつたねー」

おたがいの顔は分からない、。。だが同じ何かを持っている。

それだけでわかりあっていた。

「AZ-001、。。シリーズの最高傑作にして「はじめての失敗作」、。。。」





休日(Holiday) (後書き)

東「やつーほー束さんだよー。」

主「主ドウエース。」

エグゾス「エグゾスです。」

東・主・エグゾス「「後書きですー!!」」

主「いやーこういう感じが私っぽい。」

エグゾス「でも、大変ですね。」

主「なにが？」

東「1人で何役もやるのがってことでしょ? えつきゅん。」

エグゾス「さすが束さん、そこがしびれる、あこがれるう。」

主「グゴウバツ、、、。」

東「だいじょーぶだよぬつきゅん、誰も馬鹿にしないよ?」

エグゾス「きつとですけどwww」

主「どうあまるあっしやーい!!」

東「束さんそろそろ霧幻のところ行きたい。」

主「なら、、、サモン!! 霧幻。」

霧幻「ようもないのによぶな、、、。」

東「束さんがよんでって頼んだの。」

霧幻「、、、後書き長い。」

主「ああ、そうだね。せつかくだからえつきゅん締めはよろしくう。」

」

エグゾス「貴様はいうなRRS・FENRIRで風穴あけんぞ、

、おっと口調が、、、失礼、では誤字などがあれば教えてくれる

と助かります、、、さて霧幻、主狩りの時間だ。」

霧幻「本編の最後、、、スルー?」

刺客(Assassin)(前書き)

主「セカン党のみなさん、、、すみません。」

無壊「どうした？らしくねえ。」

主「バトルシーンは残念ながら、、、。」

無壊「セシリアの時みたいになしか？」

主「!?!」

無壊「ど、どうした？」

主「そうだ、、、あの時も、、、。」

無壊「つまり、、、本編と同じつつうことで。」

主「さすがだ、無壊君。」

無壊「しかしよお、、、もつとましな理由はねーのか？」

主「そろそろ、オリジナル要素を強くしたかった、、、とか？」

無壊「なんだ、やりやできんじゃねーか。」

主「てるなあ。」

無壊「わりいが俺にはそつち系の趣味はねえぞ？」

主「俺もだばかたれい!!」

霧幻「だから、、、長い。」

## 刺客(Assassin)

「クラス代表戦、、、最初の相手は鈴!？」

「ここまでくると、運命だな。」

「、、、中国か、、、あんまん。」

「いきなりどうした？」

「食べたい、、、。」

ズコーとなる一夏と俺。

今クラス代表戦のあいてを確認しているところなのだが。なんと一回戦目から鈴なのだ、、、。

「そ、そっか、、、で、霧幻よ甘いもの好きなのか？」

と、俺の質問にたいして。

「、、、一夏は？」

「へえ？俺にふる!？」

まあ、いきなり困るよな。

「普通かな、、、霧幻は？」

「、、、好き。」

最初の沈黙なに!!なんかもえ、、、男だもんな、、、。

可愛いと思ったが、、、ねえ?と思う一夏と無壊だった。

「がんば、、、。」

「お、おうがんばる。」

気のせい、、、ではないな。

最近の霧幻はすこし話ができるようになってきた気がするなあ。束もたまにはいい影響をあたえるなあ。

「てか一夏よ作戦とかはあるのか?まさかよお、ないとかぬかすんじゃないよなあ?」

「一応あるぞ、、、。」

その様子からして決めにくいのか、、、一回だけとかか？

「あるならいいがよお、、、ま、いい戦いを期待しているぞ？」

「まかせとけ。」

「、、、俺用事あるから、じゃね。」

「へ？用事？」

「うん、じゃね。」

「あ、ああ。」

、、、なんのだ？

そして一夏Vs鈴の試合が始まった、、、。

そのころ、、、。

「きたね！！」ファースト「一番目それともAN-001？」

霧幻と一人の少女がいた。

「、、、霧幻だ。」

霧幻はすこしいラっている。

「あ、ごめんごめんだからおこらないでちょーだい、ね？」

「むり、、、かな。」

「なんで？」

「楽しみをじゃまされたから、、、。」

「楽しみ？」

霧幻のいう楽しみとは試合のことである。

「、、、今頃だけどなにし「殺しに来たの。」、、、そう。」

その質問を待っていたとばかりに少女はすぐ答えた。

「ねえねえ、ファースト一番目「霧幻。」、、、霧幻なんで敵になったの？」

少女は質問した。

「、、、あいつを殺すため。」

霧幻はいつも通りの口調で答える。

「そう、やっぱり、、、やっぱりか、、、ふふふ、、、。」

そして大きな声で笑い出す、、、恐怖を感じるほど壊れた口調で。

「じゃあじゃあ駄目だね殺すしかないね壊すしかないねばらばらに粉々にするしかないね。サード三番目!!--」

「チャリオット聖戦車!!--」

もう一人の少女はチャリオット聖戦車というISを展開させて霧幻に突撃した。

「エグゾス!!--ワンオフ・アビリティー単一仕様能力時現凍結。タイムンジョン・アウト」

ワンオフ・アビリティーその単一仕様能力を発動した瞬間、霧幻と二人の少女以外のすべてのものが停止した。

「あいかわらず、めっちゃくちゃですね!!ファーストオ!!!--」

「だから、霧幻だ!!」

そういつてチャリオットを展開させている三番目サードと呼ばれた少女を殴った。

「く、殴られただけでシールドエネルギーが、、、。」

「この時間内は一切元の時間、、、空間に干渉できない。」

そう、この時間内ならなにをしても被害が出ない。

言い方を変えればなにをしても許される時間、、、それがこの時現タイムレンジ凍結フリーズの能力である。

「三番目をよくも、よくもよくもお聖騎士パラディン!!」

もう一人の少女もISを展開させる。

「死いいいねえええええ。」

「四番目!!そいつに特攻は。」

「言つのが遅い、大爆撃ヴォルガニカ!!」

「え、なに?エネルギーを集中させ(キイイインンガアアア)」

そして大爆発。

「があああ痛い痛い痛い。」

目の前で大爆発したので絶対防御をほとんど貫通してしまったのである。

「四番目フォース!!貴様あああ。」

「うるさい、大爆撃。」  
ヴォルカニカ

さらに大爆発。

「ああああああああああああああああああ。」

フォーンス  
四番目と呼ばれた少女は完全に気絶した。

「く、ここまでか？」

「逃がさない、単一仕様能力悪夢の宴、永久の楽園そして銀狼！！」  
ワンオフ・アビリティー デイアホリツエイジ ロスト ワード

「了解。RRS-FENRIRを2つインストール。」

銀狼を両手にもっている。

「そんなものを同時に撃つたらそれだけでこの地形が変化、まさか！！」

サード  
三番目は今霧幻の言ったことを理解した。

この時間は銀狼を解放状態で撃つための時間だと、。

「この時間での出来事はすくなくとも、元の時間、元の空間のものには影響がない、そう言ったよ。」

「久しぶりに全開です。」

「いくぞ、銀狼、完全解放。」

「モード狼呀、！！？霧幻。」  
モウガ

「どつし、！！？時現凍結が強制解除された？」  
タイムフリーズ・アウト

時現凍結が解除された、これじゃ狼呀を撃てない、しかし  
どうやって、。

「今回は、これで。」

「なっ、っ、っ。」

霧幻がふりかえるとそこにはもう三番目サードも四番目フォースもいなかった。

「霧幻、会場のほうに無人機が3機むかっています。」

「ちっ、タイミングがよすぎる、っ、っ、ここでくいとめる時現凍結タイムジョン・アウト、

っ、っ、っ。

発動すら、っ、っ、しない？どういう、っ、っ、。

「わかりました、その3機の無人機が邪魔しています。」

「っ、っ、っ、そう。」

霧幻はかなりイラついていた、っ、っ、この時点でもうすこし冷静でいられれば被害はなかったであろう。

そのころの試合会場は、っ、っ、。

「鈴、っ、っ、っ。」

「なによ？」

「本気でいくからな、っ、っ、。」

「なによ、そんなことあたり前じゃない。とにかく格の違いつてやつをみせてやるわ！！」

一夏と鈴の激しい戦いがくりひろげられていた。このとき誰も予想していなかったであろう、っ、っ、この後会場に無人機が侵入して大暴れすること。

「っ、っ、っ、まず一機！！」



刈羅の弾幕が無人機を捉えた、、大きな音とともにその無人機は爆発した、、。

だが、まだ二体ものこっている。

「エグゾス！ディアホリックエイジ！悪夢の宴の対象を二機目に。」

「了解しました、、霧幻！！無人機の一体が会場に侵入。」  
「くっ、、ならもう一機はここで落とすぞ！！」

無人機の侵入を許してしまったのだ。普段の霧幻ならそのようなミスはなかったであろう、、だがいまの霧幻はイラついていて弾を正確に当てられなかったのだ。

そして、霧幻はさらにイラつく。

さらに正確な射撃ができなくなっていく、、ディアホリックエイジ悪夢の宴も万能ではない。ミサイルと同じである程度正確に狙わなければあたららないのである。

「霧幻、おちついてください。」

「、、、、そうだな。」

霧幻は深呼吸をした、、無人機の攻撃をさけながら。

そして、会場のほうも激戦となっていた。

「どーするのよお！？なんか作戦がなくなっちゃコイツには勝てないわ

よ。」

無人機の激しい弾幕が一夏と鈴を襲う。一夏の攻撃がヒットせずこの無人機を倒せないのである。

「逃げたきや逃げてもいいぜ」「誰が逃げるっていうのよ、私はこれでも代表候補生よ!!」「そうか、なら俺もお前の背中ぐらい守ってみせる。」

今のセリフを聞いて顔を赤らめる鈴。そして無人機の攻撃。

無人機はこれでもかってぐらい弾を乱射する。

一夏と鈴は回避するので精いっぱいだった、。

「、、、これで、、、終わり。」

霧幻はグリフォンで無人機のコアを撃ち抜いた。

無人機は完全に機能停止した、。

「会場の無人機は!!」

「停止を確認しました、、、、。」

「、、、そう。」

こうして、この事件は幕を閉じる、、、はずだった。

場所????時間????

そこには千冬、真耶そして、。

「、、、きたよ。」

霧幻がいた。

「きたか、、、。」

千冬が霧幻を呼んだのだ、、、。

「織斑先生！？こんなところに生徒を「霧幻知っていることを話せ。」

「、、、なにを言ってるのですか？織斑先生。」

千冬の質問、それを聞いて動揺する真耶。

「、、、。」

だが、霧幻は話そうとしない。

「話せないか？」

「できたら、、、。」

「だが、霧幻被害がでたのだぞ？それでもか？」

「、、、すくなくとも命が惜しいなら聞かせられない。」

そう言って霧幻は部屋を出て行こうとした。

「それでもだ、教える。」

千冬の一言。そして、。。

「わ、私も。知りたいです。」

真耶も言いだした。

「遊びじゃな」そんなことはわかっている。「。。山田先生も？」  
「わかっています、。。ですが私も被害者ですやっぱり気になります。」

「。。管理者。」

「「管理者？」」

「そう。管理者。」

「その管理者ってなんですか？」

真耶の質問

そして、霧幻はこう答えた。

「管理者はいつもそばにいる、。。いつも。」  
「どういう。。。」

そして霧幻はいなくなった。

タイムジャンプ・アウト  
時現凍結を知らない真耶と千冬は驚いた。

「な！？消えた。」

「霧幻君！？」

。。。。しばらくの沈黙。

「織斑先生、、、。」

「なあ？真耶、最後に言ったいつもそばにいるってどういう意味なんだろうな、、、。」

「へえ？、、、すみません。わかりません。」

「大丈夫だ。私もだ。」

霧幻、、、お前は何を知っている。いつもそばにいるって、、、。

「すみません。」

こんどはいきなり現れた。

「うわっむ、霧幻君。」

「どうした？」

「今のは誰にも言わないでください。」

「そんなことはわかってる、それより最後の言葉の意味を、、、  
て。」

もう霧幻はいなかった。

「自由ですね、、、霧幻君。」

「まあ、明日にでも聞かさ。」

この後何回も聞いたがそのたび霧幻は、、、。

「いつか、わかるのでその日まで。」

と、言って教えてくれなかった。

夜、霧幻の部屋。

「束いつくるかな？」

「さあ？遅れるって言っていましたけど。」

今日は束が来る日である。さっき電話がかかってきて。

「ごめんねー、ちょっと束さん遅れるから。でもでも絶対いくからねー。」

と、、、。

「、、、しかし暇。」

「あ、そういえば。」

「どうしたエグゾス？」

「あの新聞のデータを誰かがコピーしたけいせ「なぜ言わなかった！！」すみません、、、忘れてました。」

霧幻はエグゾスを地面に投げた。

「やつほー、、、お取り込み中だった？」

IS状態のエグゾスと霧幻が戦っている、、、なんとも不思議な光景である。

「貴様はいつつも遅いんだ！！」

「痛い、ちよつとISに背負い投げってどんな怪力ですか！！」

「貴様はISだろ？痛いもクソもあるかあああ。」

「だからってうわあああ。」

次は胴絞、、、。

「反則、反則!!!」

「知るか!!!」

「そろそろつつこんでもいい?」

まあ、きつと誰でもツツコミを入れたくなると思う、、、。

生身の人間がしゃべるISと柔道（禁止技あり。）をしているのだから。

「きてたの?」

「い、いまきたんだよ。」

「、、、そう。」

さすがに霧幻は疲れていた。

「ごめん、、、いま部屋片付ける。」

「手伝だったほうがいい?」

「平気、、、エグゾス。」

「へえ?私もで「もう一回ぐらい投げてやるっか?」「すみませんでした。」

少年片付け中（笑）

「終わった、、、。」

「まったくむげ「死にたい?」すみませんでした。」

「あはは、、、。ねえどうしてこうなったの?」

「え、、、えーと。」

束の質問にどう答えようか、、、、。

「ある新聞のデータをなにものがコピーした形跡があったんです。」

「エグゾス!？」

「何か知りませんか？束さん。」

霧幻はエグゾスがとつた行動におどろいた。

「うーん、、、あ、それちーちゃんかも!!--」

ちーちゃん?いや、、、それよりも。

「見たの?」

「うん。」

「いつ?」

霧幻はいつも通りの口調を装っていたがさすがにあせっているのがバレバレだった。

「えと、、、ごめんね。」

さすがに束も様子がおかしいことに気付いた。

「あ、、、い、いや、、、俺の、、、過去だから。」

かなり口調が乱れてる。

「えと、、、怖いよね、おかしいよね、普通じゃないよね。」う

ん普通じゃないけど怖くはないよ。霧幻は霧幻だし。」

「、、、じゃあこれからも来てくれる。」

「もちろん!!--」



それをきいて安心した霧幻。

だが、もうひとつ。

「で、、、ちーちゃんってダレ?」

「え、あのやつは怒ってる?」

「モチロン、、、デ、ダレダ。」

「あやまるから、ね、ね。」

「ダカラ、、、ダレ?」

「ちーちゃんはちーちゃんだよ!!--」

「3、、、。」

霧幻は銀狼を構えた。

「2、、、いー」千冬ちゃんって言えばわかる?」「、、、あいつか。」

霧幻は銀狼をしまった。

「でも、頼んだのは束さんだよ、だよ。」

束はベットの下に隠れながら答えた。

「もう平気、、、怒ってないから。」

「本当?」

「うん、本当。」

「よかった!。」

束はベットのしたからでてきた。

「そのかわり。」  
「そのかわり？」  
「他の人には内緒、、、いい？」  
「あとむっくんも知ってるよ。」  
「むっくんって誰？」

さきほどより落ち着いた口調である。

「無壊くん。」  
「そう、、、他には？」  
「いないよ？」  
「わかった。あともう一つお願い。」  
「なに？東さんにできることならなんでもオッケーだよん。」  
「もし、あいつの居場所がわかったら教えて。」  
「うん、、、わかった。」

東はすこしがっかりした、、、霧幻には殺しをしてほしくなかったからだ。

「ケーキあるけど食べる？」  
「いいの？」

すこし控えめな口調の東。

「、、、もうひとつ約束追加。」  
「な、なに。」  
「怖いかもしれないけど今まで通りでいてほしい、、、。」  
「全然いいよ！ー！むしろいいの！ー！」  
「うん。」  
「じゃあ、じゃあ改めてよろしくね霧幻。」

「うん、こちらこそ。あとケーキ食べる!!」じゃあ今用意する。」

霧幻はこう願った、  
せめてこの時間だけは長く続いてほしい、  
と。

刺客(Assassin)(後書き)

主「いやー新年あけましておめでとございます。」

霧幻「あけおめ。」

主「しかし、最後フラグっぽくない？」

霧幻「多分、大丈夫。」

主「でもからおーこれはまだまだ先のお話だったね。」

霧幻「死ぬまでにあいつは殺す。」

主「そう？まあいいとして。とりあえず、まだまだ色々酷いですが見てくださっているみなさんに感謝します。」

霧幻「間違いとかあったら言って。」

主「ではよいお年をノシ」

過去の断片 The past fragment (前書き)

ゼイン「主に修正が必要だ、。。」

霧幻「エグゾス？」

ゼイン「私ではない、だが私だ。」

霧幻「どうした？」

ゼイン「本文でわかる、。。」

主「投稿遅れてすみませんでした。」

ゼイン「見ている人がいればの話だな。」

主「ガハッ。」

過去の断片 The past fragment

「ふう、やっと解析がおわったよ。」  
「おつかれ。」

霧幻は束にこんなことを頼んでいた。

「調べてほしい、、、エグゾスを。」

束もなぜこんなお願いをされたのかわからなかった。

「とりあえず、分かったことだけ言っね。」

「了解。」

「まず、コアが3個あること。」

「それは知ってる。」

「じゃあ次、拡張領域バースロットに制限がない。」

「知ってる。」

「うーん、知らないことあるのかな？次エグゾスは人格が二つあること。」

「そうなの？」

束は驚いた。これは知っていると思っていたからだ。

「え〜!!な、なんで知らないの？」

「うん、知らない。」

「そ、そういうことじゃなくて一番分かりやすいよ。」

「そうなんだ。」

「そうなんだって、、、まあ霧幻らしいかも。」

「私も知りませんでした。」

「さすがにもうわからないな。これ以外は束さんでもおてあげだよ。」  
「そう。」  
「うう反応冷たいな、、束さん泣いちゃうよ。」  
「じゃあ、俺も泣く。」  
「なんでそうなるのー。」  
「、、、面白い。」  
「ま、また束さんをからかったなあ。」  
「ごめん、よしよし。」

霧幻は束の頭をなでなでした。

「む、、卑怯だよ。」  
「なにが？」  
「もう。」  
「ん？、、束。「なに？なに？」もう一つの人格にできる？」  
「うん、できるけど、、なんか危険な気がするんだよね。」  
「危険？」

束はこの人格がどういうデータ領域にいるのかを話し出した。

「この人格は処分データなんだよ。」  
「それって。」  
「ふつつ消えるはずなんだけど、、。」

。そう、普通は消える。そんな領域にいるのに消えない。つまり、、  
「そのぐらい、、影響力が強い？」  
「たぶん、束さんはそう考えてるよ。」

「エグゾス。」

「わかっていきます。ですが危険と判断したらすぐに私に戻してください。いいですね？」

「了解。」

「じゃあ、いつくよ。」

束はまるでピアノを弾くようにキーボードを操作している。

そして数分がたった。

「きた！！えつきゅんいくよ。」

「はい、あとはよろしくお願いします。」

そして目の前でエグゾスは変化した。背中にあつた複数のブースタ  
ーは大きな二つのブースターになり色も黒>赤の比率だったのが黒  
<赤になった。そして武装も一部変化した。

「名前は？」

「ほう、、、汝が我を呼んだのか？」

いつものエグゾスと雰囲気が違う。そして見た目もかなり違う。

「うん。で、名前は？」

「熾天使してんしと書いてセラフだ。」

「、、、今日からゼインね。」

「拒否権は？」

「ない。」

さすがにセラフというISはビックリしたようだ。



「私に拒否権はないか。」  
「だって人権ないし。」  
「そだな、しかしなぜゼイン？」  
「エグゾスかゼインで悩んでいたから。」  
「そうか、面白い。ゼインか、わかった。」  
「そう。」  
「しかし霧幻？」  
「なに？」  
「私は弱き者に力を貸すつもりはない。」  
「普通逆な気が、、、じゃあ強い？」  
「主語がないと分からん。」  
「低能、、、。」  
「本当に言いたい放題だな。」  
「俺は強い？」  
「私の試練を乗り越えることができたなら強いだろう。」  
「どんなの？」  
「霧幻の影と戦ってもらおう。」  
「影、、、。」  
「どうする？」  
「べつにいいけど？」  
「そうか、束頼みごとがある。」  
「はいは〜い、束さんはなにすればいいの?。」  
「とりあえず、私にISを貸してほしい。」  
「いいけど、、、本当になににするの?。」  
「見てからだ。」  
「はい。」

束はISをゼインに渡した。

「このISをどうするの?。」

束は興味津々に質問した。

「簡単だ、私をこのISにインストールする。」

「どづいづい、、、、。」

霧幻はこの光景をみて啞然とした、、、。

「うそ！！た、た、ただの打鉄うちがねがゼインになっちゃった!？」

そう、ただの打鉄うちがねがISが第4世代型のIS（に近い）になってしまったのだから、、、。

「すごい力。」

「まったくです。」

さきほどまで、ゼインだったが今はエグゾスになっている。

「よけいエグゾスがわからなくなったよ。」

と、束は頭を抱えながら呟いた。

「私はエグゾスでありエグゾスではない。」

「すみません、ゼイン「なんだ？」その試練を。」

エグゾスは霧幻が飽きる前に質問した。

「そうだったな、、、では霧幻の影と戦ってもらおう。」

「まずは、あの単一仕様能力ワンオフ・アビリティですか？」

「そうだな、頼む。」

「使えないのですか？」

「さすがに単一仕様能力はコピーできない。  
ワソフ・アビリティー」

「そうですねですか、、、なら私が時現凍結!!  
タイムシン・アウフ」

時は止まった、、、そしてゼインに知らぬ間に人が乗っている、、、

その人は霧幻にそっくり、、、いや瓜二つである。

「影つて、、、最悪。」

その霧幻？は昔の殺しが大好き、、、殺し以外なにも知らなかったころの霧幻である。

「霧幻!!」

その影からの攻撃、、、。

右手の直角三角形の定規みたいな大きな銃から強力なレーザーが連射されている。

カアオ、カアオと低くそして力強い音が響き渡る。

「威力は銀狼なみで連射可能だ?!？」

「霧幻いったん距離を!!」

「オソイ、カルラ。」

今度は刈羅の弾幕、受けてみないとわからなかったが非常に避けにくい。

そして右手のレーザー、、、。

「くっ、狼呀と悪夢の宴。」  
ディアホリックセイジ

ガアアアという大きな音そして大きな核のような大爆発、、、し  
かし。

「、、、駄目か。」

ゼインと影はびんぴんしている。

「オカエシ、、、ゼイン。」

「修正が必要だKRSWバーストモード。」

「キエテシマエ。」

ガアアオという音が響き渡りすべてを薙ぎ払うまさしく核を超え死  
そのものを表したような大爆発。

「がああああ、、、。」

霧幻とエグゾスはぎりぎり耐えた。耐えるためにほとんどのエネルギー  
ギ―を使用してしまったが。

「く、、、これ以上は危険です。」

「マダシナナイカ、ナラミサイルトカルラノアメハドウダ？」

影は適当にミサイルと刈羅を連射した。

「ロスト永久の樂園。ワード」

永久ロストの樂園ワードで霧幻は全てのエネルギーを回復させた。

そして刈羅とグリフォンで防御する。

だが、、、。

「マダシナイ？カラサワバーストモードダ。」

「また!？」

また、さきほどの大爆発。

「ディメンジョン・アウト時現凍結がなかったら日本終わってたな、、、。」

そのぐらい強力な一撃を何回も撃ってくるのだ。

正直たまったもんじゃない。

「どっにかしないと、、、。」

そろそろ永久ロストの樂園ワードの使用限界時間に到達してしまう。

「ドウシタ？コノテイドカ？」

「、、、終わらせる。」

「ドウヤツテダ？キサマノハウガフリデアロウニ。シカモゼインハ、ツネニロストワードジョウタイナノダゾ？」

「そう。」

「ナニヲスルツ、、、!？」

簡単なことだ、勝つための単一仕様能力ワンオフ・アビリティを作ればいい。

それがエグゾスのみに与えられたISの常識を覆す能力。

「ワンオフ・アビリティー単一仕様能力発動、カオス ラグナロク理の理。」

「いきます!!!」

「どんな力か私に見せたみる!!!」

「作成完了!!!おわらせる。」

「作成? まあいい。こちらも締めとしようKRSWバーストモード  
!!!」

「サア、シネ。」

影はKRSWを構えた。

「ワンオフ・アビリティーなら、オートマティック・アームズ単一仕様能力発動、自立武装これでどうだああああ!!!」

霧幻は無数の狼呀を出現させた。

その無数の狼呀から一斉にエネルギー弾が放たれる。

「まさか、自分の武装をビットに変える能力!?!」

「これならシールドエネルギーも一発でなくなるはずだ!!!」

「カラサワデモソウサイシキレナイ!?!」

たしかにKRSWは強力だ、だが1個。まさに数の暴力?である。

「消し飛べ、、、。」

無数の大爆発。タイムジャンプ・アウト時現凍結がなかったら日(r y

「私の、、、負けか。」

「負けた? 無傷なのに?」

その無数の一撃を受けたはずなのに無傷であった。影はいなくなっているが。

「いや、何回も壊れて何回も復活しただけだ。」

「、、、復活機能つきなの？」

「エグゾスが壊れなければな。」

「、、、そう。」

「しかし見事私の試練を乗り越えたな。」

「、、、もう一戦とかかんべんね。」

「いや、私もだ。」

「じゃあ？今日から俺のISになるの？」

「いや、私はエグゾスの中に還る。」

「そうなの？」

「だが、私の一部の力を渡そう。」

「ありがとうございます。」

「、、、また会える？」

霧幻はすこし悲しそうな顔で質問した。

「ああ、エグゾスの許可があれば。」

「私はいいですよ。」

「そうか、ならまた会おう。あと、ISを貸してくれたことを感謝するといったいてくれ。」

「わかった、、、じゃあまたね。」

そしてさきほどまでゼインだったISはもとの姿に戻っていた。

そして、、、。

「エグゾス。」  
「了解、時現凍結解除。」

自分の部屋に戻ってから解除した。ちなみにさきほどまでは霧幻の部屋ではなく日本海を中心？あたりで戦っていました。

「あれ？、、その様子からして終わったの？」

ちなみに、東は時現凍結タイムジョン・アウトに対応していない。一部の人間以外認識できないのである。

「うん。戦闘データは見たかったらエグゾスに頼んで。」

「りょかい。」

「東、ISありがとうだって。」

そういつて霧幻は打鉄うちがねを束に返した。

「あ、霧幻！！」

「どうした？」

「ゼインは？」

「エグゾスのなかに戻った。」

「そうなの？」

「はい、たしかに私の中に戻りました。あと、一部の武装が強化されました。」

「とてつもなく嫌な予感が、、エグゾス、スペック表。」

「どうぞ。」

見せてもらったが、、やはり。

「M W L R - K R S W？東さんが見たときこんな武装なかったよ？」



「、、、能力を簡単にまとめると銀狼よりすこし威力は下がるけど連射可能。」

「、、、え〜と少しってどのぐらい?」

「普通のISなら一撃。」

「それって普通に危険だよな?」

「あと最大出力は狼呀以上。」

「、、、もうISの範囲を超えちゃってるね。」

束ですらこのISは超えられない、そう感じたのである。

「他には?」

「MWM - CENTAURというミサイルとMWM GINIXというマシンガンが追加され、、、あとはMWHG - ORCがなくなり、MWNB - MOONLIGHTが2本になりました。」

「あのミサイルか。」

ちなみにMWM - CENTAURは刈羅と一緒に使われました。

「全部戦艦とかに積んでそんな強力な武装だね。とくにこのMWM GINIXなんかマシンガンじゃなくてチェインガンだよ。」

「そのぐらい威力高いの?」

「うん。あくまでスペック上だけだね。」

「束は凄いね。」

「へ、なにが?」

「俺は見ただけじゃ分からないから。」

「そ、そう?でも霧幻のほうが束さんは凄いなと思うよ。」

「そう?俺じゃなにがなんだかさっぱりなのに。」

「でもエグゾス作ったのって霧幻なんですよ?」

束はすこし低いテンションで質問した。

「途中までは、、あとはエグゾスの指示通りに部品集めただけ。」

「へ、そうだったんだ。」

「霧幻ではなく私が凄いんです。」

「黙ってる。」

「事実ですから。そもそも霧幻が作ったのって私という人格だけじゃないですか。だから分からないことが多いんじゃないですか？」

「エグゾスだって自分の分からない部分があるから解析を依頼してほしいって俺に頼んだだろ。」

「うぐ、、痛いところをつきますね。」

「はぁ疲れる、、とにかくそういうこと。俺達でもわからないことを束はわかるだからすごいそれじゃ駄目？」

「ううん。束さんはそう言ってくれととてもうれしいよ。」

すこし顔を赤くしながら笑顔で束は答えた。

「、、、やっぱり笑ってたほうが束らしい。」

「へ？もしかして「本当のことを言っただけ。」じゃあ、そういうことにしておくね。」

「だから、ほんと「うんうん、束さんはわかってるよ。」だから、まあいいか。また解析頼んでいい？」

「むしろ、調べたいです。」

「じゃあ、またよろしくね。」

「うん！！、、束さんすこし疲れちゃったからなんか甘いものが食べたいな。」

「、、、アイスあ「たべたい！！」用意するね。」

こうして今日もまた束と仲良くすこした霧幻だった。

場所????時間????

「フォース四番目ちゃん!?なにがあつたのサード三番目ちゃん?」

サード三番目とフォース四番目、そして。

「カノンですか、、、じつはですね。」

カノンと呼ばれる少女がいた。

「え?お兄ちゃんと戦つたの?」

お兄ちゃんとは霧幻のことである。

「ええそし」どうしてお兄ちゃんど?」え?ですから説明した通り、  
、、。  
」

カノンはとても怒っている。そんな感じがした。

「私たちのお父様の敵になつたのですよ!?まさかカノンあなたまで敵になるつもりですか!?」

「、、、、。」

「カノン!!--」

「ごめんね、お兄ちゃんのほづが大切だから。」

「なら!!--」

サード三番目はチャリオット聖戦車を展開させる。

「<sup>チャリオット</sup>聖戦車じゃ、、、勝てないよ。」  
「それでもです、さあカノンいや六番目<sup>シクス</sup>!!あなたもISを展開してください。それともこのままやられますか?」  
「、、、わかったよ三番目<sup>サード</sup>ちゃん。」  
「<sup>シクス</sup>六番目あなたの覚悟を見せてください。」  
「、、、マシニクル!!」

激しい銃音、、、そして。

「さすがに、、、無理ですか。」  
「ごめんね三番目<sup>サード</sup>ちゃん、、、。」  
「止めは刺さないのですか?」  
「、、、じゃあね。」

<sup>シクス</sup>六番目はそういつて消えた。

「<sup>シクス</sup>六番目、、、あなたは優しすぎます。」

<sup>サード</sup>三番目は泣いていた、、、ひとりで。

「ほう、これはこれは。」  
「お、お父様!?これはその、、、。」  
「言わなくていいさカノンだろ?」  
「は、はい。」  
「カノンはあいつに似ているからな、、、とりあえずは平気かな。」  
「いいのですか?」  
「ああ、ここには絶対に来ないだろうし。」  
「なぜそう言い切れるのですか?」  
「ん?ああ、きっとカノンは優しいからあいつに殺しはさせたくないと思うはず。だと思ってね。」

「たしかに、。。」  
「それにいい機会だ、移動しようかスコール・ミューゼルに呼ばれているし。」  
「そういうことなら、すみませんお父様。私がこんなにも弱くて。」  
「ん？しょうがないさ相手が悪かった。それに私はそんなことは気にしないさ。」  
「ですが、。。」  
「三番目は真面目だねえ。だから信用できる。」  
「あ、ありがたきお言葉。」  
「いいってそんな。とにかく行くつか。あと四番目もね。」  
「はい！...！」

そして、時が経ち再会した。

過去の断片 The past fragment (後書き)

主「ふーふっはっはっはー後書きだよ。」

ゼイン「ターゲット確認排除開始。」

主「な、なにをする、、、あ、アツーーーーー！」

「

霧幻「主がぼこぼこに、、、。」

カノン「あ、いた！お兄ちゃん。」

霧幻「いや、まあ後書きだし本編と関係ないからいいか。」

カノン「久しぶりだね。」

霧幻「ああ、そうだな。ちなみに次の次だ。」

カノン「ちよつとネタバレでラウラちゃんとシャルロットちゃんと

一緒に入学します。」

霧幻「シャルルくん。」

カノン「あ！！そうだったね。」

主「し、死ぬかと思った、、、と、とにかく次の話はみなくてもいい

新しい武装とかの説明ね。」

霧幻・カノン「と、いうわけで次々回をお楽しみに。」

主「あれ、なにこれ超虐められてない？、、、誤字やここの表現が

おかしいみたいなのがあったら教えてくれると助かります。では、

あれ？みんなうねえどこー。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8645z/>

---

IS ~ 妄想の果てに ~

2012年1月3日05時46分発行